Ⅰ　全体研究主題

「児童生徒一人一人にとっての自立を目指した授業（指導や支援）をつくる」

～キャリア教育の視点を取り入れた授業の充実を目指す～

Ⅱ　研究主題設定の理由

平成２１年度まで本校では、「地域で豊かに生きるための支援はどうあればよいか」という全校テーマを掲げ、３年次にわたって研究を行った。その中で、本校の児童生徒が地域で豊かに生きるためにつけたい力・補助的な手段の活用・環境設定の在り方について示唆を得ることができた。しかし、課題として普段の実践（授業・効果的な支援ツールの検討・職員間の共通理解・小中高の連携）にどのように活用していくかという課題も挙げられた。

本校の児童生徒の実態は、重度重複化傾向にあるとともに、一方で軽度の発達障がいなどの児童生徒も増加してきている。そのため、進路希望も多様化しているとともに、近年の社会情勢もあり、必ずしも希望通りの進路に進むことができるわけではない。多くの児童生徒が卒業後に、仕事・生活・余暇の面で、課題を抱えている実態もある。このような児童生徒に対し、学校段階において、年齢や発達段階に応じて、将来の豊かな生き方につながる指導の必要性が高まってきている。

一方でキャリア教育の重要性も年々高まってきている。文部科学省においては、キャリア教育を「児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育成し、職業生活を通じてどう生きるかを考えさせる教育である」と定義している。そのため、それぞれの年齢や発達段階に応じたキャリア教育が求められてきている。

教員の最大の専門性といっても過言ではない授業力向上について、平成２１年度学校教育指導指針によると、校内研究について、「教員が主体的に参画できる授業研究会を企画し、教員一人一人の授業力の向上に努める」と挙げられている。その具体例として、「小グループでの協議等を取り入れたワークショップ方式の導入など全員で意見交換ができる授業研究会が効果的である。」と示されている。

そこで、本研究では、キャリア教育の視点を取り入れた授業実践を積み重ねる中で、目標・内容・支援の設定と、授業改善について、ワークショップ型の授業研究会の実践や、略案の様式を検討する中で探っていく。また、これらの実践の中から、各学部のキャリア教育の在り方についても検討していく。

Ⅲ　研究の目的

１　児童生徒一人一人のより良い自立を目指し、キャリア教育の視点を授業（指導）の目標や内容、支援に生かす。

２　効果的な授業（事例）研究会を目指し、児童生徒のより良い成長を促す授業（指導）の改善や教職員の授業（指導）力向上を図る。

３　キャリア教育の視点を取り入れた授業実践を積み重ね、各学部のキャリア教育の在り方を明らかにする。

Ⅳ　研究の内容と方法

１　キャリア教育の視点を取り入れた、授業目標・内容・支援方法などを設定する。

２　効果的な授業（事例）研究会として、ワークショップ型授業研究会やインシデントプロセス法を取り入れた事例研究を運営し、それを授業（指導）改善に活用するよう取り組んでいく（改善システム・略案様式等）。

３　各学部において、キャリア教育の視点を取り入れた授業実践や研究会、キャリア教育への取り組み方について検討を積み重ねる。

Ⅴ　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4	全体研究計画提案（4/27）	4	全体研究会①（4/28）　各学部研究実践 「２年次の取り組み」
5	全体研究会①　各学部研究実践 主題の決定と研究計画	5	
6	校内研修（キャリア教育）	6	全校授業研究会（中）
7	校内研修（授業研究）	7	
8		8	
9		9	全校授業研究会（小）
10		10	全校授業研究会（高）
11		11	
12		12	全体研究会② 最終報告
1		1	研究集録製作
2	全体研究会② 中間報告「１年次のまとめ」	2	
3		3	研究集録（CD と HP）

※　毎月の学部研究と、全体での授業研究会を年３回実施する（各学部１回ずつ）。

Ⅵ　研究実践

小学部

１　主題

「児童一人一人の将来像を想定した授業をつくる」

～キャリア教育の視点を取り入れた授業改善～

２　研究主題の設定

本校小学部では平成 21 年度まで「小学部段階における地域で豊かに生きるための支援の在り方」について交流学習の場を利用した取り組みを行ってきた。その結果、交流教育を通して本校児童が地域で豊かに生きるための力をつけつつあることが検証された。しかし、課題として普段の授業において児童一人一人に育てたい力を学習内容に位置づけていく必要性が挙げられた。また、本校児童生徒の現状から卒業後の豊かな生活を見通した支援の必要性が高まってきている。そのため小学部から発達段階に応じて児童の将来像を想定したより良い授業を行っていく必要があるといえる。

しかし、本校小学部における授業づくりの現状と課題について小学部職員の意見を集約すると、異なる実態の集団による効果的な授業の在り方や TT の連携の在り方、児童の実態の共通理解を図る場の必要性など様々な課題が挙げられた。また、小学部段階において児童の将来像を想定することが難しい、集団内の実態の差が大きく授業において個別のねらいを盛り込むことが困難といった課題も挙げられた。

本研究では、授業研究会においてキャリア教育の視点を取り入れた授業実践・改善を積み重ねる。そこで、小学部段階におけるキャリア教育の視点を取り入れた授業の在り方、ねらいについて検討する。このことにより、児童の将来像を想定した授業内容・方法・目標を設定でき、普段の授業をよりいっそう充実させ発展させることができると考える。さらに、授業研究会において、授業における課題を解決する場・児童の共通理解を深める場を設定し、小学部職員の授業力向上を図ることとする。

３　研究の目的

（１）　より良い授業づくりを目指し、児童の豊かで幸せな将来像を想定した授業内容・目標・支援方法を設定する。

（２）　授業研究会を通して､児童のより良い成長を促す授業の在り方を検討するとともに、教職員の授業力向上を促す。

４　研究の内容と方法

（１）月１回程度の授業研究会を行う。

・　児童一人一人の想定される将来像、及びその将来像を達成するため現在必要な力について検討する。それらの力の獲得を目的とした授業を行い、授業検討会を開

催する。指導案は略案とする。国立特別支援教育総合研究所作成の「キャリアプランニングマトリックス　小学部段階において育てたい力」の中から授業において育てたい力を記述する。(記述様式及び記述方法については別紙)。

- 授業研においては、ワークショップ型授業研究会を行い、目標・内容・支援方法の検討をする。さらに、キャリア教育の視点から、授業の改善点などを検討する。
- キャリア教育の視点を取り入れた授業の在り方について検討し、まとめる。

（２）文献などを用いて小学部段階のキャリア教育についての理解を深める。

- キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説　改訂版を用い、考えられる授業内容などを検討する。このことにより、キャリアプランニングマトリックスの観点について、職員の理解を深める。

5　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4		4	小学部２年次研究計画の検討
5	小学部研究計画の検討	5	個々の児童の将来像、現在必要な力の検討
6	文献などによるキャリア教育の理解	6	キャリアプランニングマトリックス観点解説の理解
7		7	授業研
8	授業研・略案様式検討	8	
9		9	全校授業研
10		10	小学部研究のまとめ
11		11	小学部研究報告の検討
12	１年次のまとめ	12	全体研究会② 最終報告
1		1	研究集録製作
2		2	
3		3	研究集録（HP）

6　研究実践

（１）１年次の成果

- キャリア教育の視点を略案に記入することが、児童の将来像について考えるきっかけとなった。
- キャリア教育の視点を略案に記入することにより、授業のねらいが明確になった。
- 児童の将来像を想定したより良い授業づくりについて、小学部の現状と成果、課題を共有することができた。

・　支援方法、教材について多くの改善策を小学部職員が共有することができた。
・　授業研究会が児童の実態及び授業内容、目標、支援方法について小学部職員が共通理解する場となった。

（２）１年次の課題

・　１年次は略案の上部にキャリア教育の視点として、キャリアプランニングマトリックスの項目を記述した。しかし、T2 以下の職員へ意図が伝わらないことがある。
・　児童一人一人の将来像は異なるため、略案へより具体的、個別的な記述が必要。
・　職員によって略案の記述の仕方が異なり、統一性がないため記述しにくい。
・　略案にキャリア教育の視点を記述する際、無理な当てはめ、関連づけを行うことがある。
・　授業によってはキャリア教育の視点を限定することが難しい。（低学年の授業、包括的な授業、余暇を中心とした授業など）
・　小学部段階で、児童の卒業後を見通すことは難しい。小学部段階での将来をどの段階に設定するか検討する必要がある。
・　キャリアプランニングマトリックスは、ワークキャリアを主としているように感じる。小学部としてはライフキャリアを想定した授業も行っていきたい。
・　授業研究会において出された意見、改善策を校内ｗｅｂ上に記載するだけでは、小学部職員全体が意識し活用するためには不十分であった。意見を共有し、より活用しやすくするための方法について検討が必要である。
・　ワークショップにおいて、意見が支援内容や教材教具に偏る傾向がある。TT の連携などについて意見が少ない。

（３）二年次の研究

児童一人一人の将来像を想定したより良い授業をつくるための取組

より良い授業づくりを行うためには、児童一人一人の将来像を想定し、その将来像を達成するために現在必要な力を獲得する必要があると考え、以下の取り組みを行った。

ア　児童一人一人の将来像を想定するための取組

ａ　研究内容

・　小学部卒業段階において身に付けさせたい力について、中学部高等部職員にアンケートを実施した（資料１）。このアンケートは前年度の課題であった、小学部段階では児童の高等部卒業後を想定しづらいこと、小学部から高等部までの系統的な指導を行う必要性を踏まえ実施したものである
・　前述したアンケート結果を参考にし、各学年 1 名の児童を抽出して想定され

る将来像、及びその将来像を達成するため現在必要な力について複数の職員で検討した（資料 2）。

b　成果

中学部高等部職員へのアンケート結果は、小学部職員全員に配布した。アンケート結果を児童の将来像を検討する際参考にした職員は 17 人中 11 人である。アンケート結果を普段の授業づくりで意識した職員は 17 人中 8 人であった。中学部高等部職員が小学部卒業時の児童へ求める力について、児童の将来像を検討する際、有効に使用することができた。

また、中学部高等部職員へのアンケート結果をふまえ児童一人一人の将来像を検討したことの成果は以下の三点である。

・　将来像などを複数で話し合うことにより、児童の現在の課題や将来像達成のために必要な力について、様々な視点から客観的に把握することができた。
・　児童の現状や将来像について共通理解を深めることができた。
・　将来像や現在必要な力について話し合うことで、現在及びこれからの指導に根拠が生まれた。

c　課題

・　各学年一人の児童を抽出して検討したので、他の児童の将来像なども検討する必要がある。

イ　児童一人一人の将来像を想定したより良い授業づくり

a　研究内容

・　（１）で検討した現在必要な力の獲得に向けた内容を含む授業研究会を行った（資料 2、3）（表 1～3）。
・　略案に国立特別支援教育総合研究所作成の「キャリアプランニングマトリックス　小学部段階において育てたい力」の中から各活動において育てたい力を記述する欄を設けた（資料 3）。なお、授業研究会においては育てたい力の他に、それらの力の獲得に向けた具体的な内容や目標を記述した。
・　小学部研究会において、ワークショップ型授業研究会を行った。授業研究会では、前述した力の獲得に向けた授業の在り方について検討した。協議の柱は授業者が検討を希望する事項、および前述した力を獲得するための目標、内容、支援方法などとした（表 1～3）。

表 1～3　各授業研における現在必要な力、その獲得を目指す活動、協議の柱、課題及び改善策

表１　小学部６年　生活単元学習　買い物

現在必要な力と活動	横断歩道のある道を安全に横断する →自分で車の有無を確認し道を横断する	
協議の柱	・　それぞれの単元目標が達成されるための方法 ・　自分で判断して道を渡ることができるための方法	
課題及び改善策	・　お釣りや商品のもらい忘れを防ぐ ・　落ち着いてお釣りを財布にしまうことができるようにする ・　安全に横断するための判断基準があいまいである	→手順表を児童が作成する もらったお釣りで自分の好きなものを買う活動をする 買い物計画をたて、事前にお釣りがいくら返されるか知っておく →口が大きい財布に変更する →車が見えるかどうかではなく車が停止したら渡る方法にする より現実感のある交通安全教育を行う

表２　小学部３年　生活単元学習　畑作業

現在必要な力と活動	丁寧に作業する（A 児） →収穫に適した帝王貝細工を収穫する	
協議の柱	・　教材教具の工夫について ・　作業内容について	
課題及び改善策	・　活動への見通しがもちづらい児童に対する活動量の提示方法　作業の持続を図る方法（C 児、D 児） ・　作業完了の報告を自ら行う方法（B 児）	→一度に行う作業は一つに絞る 一回ごとに完了する活動内容にする （石を一個拾う→一個捨てる） 児童にとって負担の少ない活動を繰り返し行い定着を図る　その後徐々に負担を増やす →報告の際、発声を促すのではなくカードを渡す B 児が自ら行えず困っている時には、T2 が見本を示す

表３　小学部１年　日常生活の指導（朝の会）　国語算数

現在必要な力と活動	落ち着いて 15 分程度着席している →着席して朝の会に参加する　机上学習を行う	
協議の柱	・　言葉を正しく話すための方法 ・　教師の促しに応じて発声するための方法 ・　落ち着いて着席し、朝の会や学習に取り組むための方法	
課題及び改善策	・　正しい言葉を自分で確認する方法	→文字の学習を進め、文字と音のつながりを意識できるようにする
	・　強制せずに正しい言葉を示す方法	→リズムに乗せて一緒に発声する
	・　強制せずに発声を促す方法	→カードを使った意思表示ができるようになってから発声を促す 児童にとって楽しい活動をしながら偶発的に発声できた時に賞賛する
	・　朝の会に着席して参加する方法	→視界を整理し、必要なもの以外の掲示物は移動する 朝の会の次第カードの最後に、児童の好きな活動の写真を提示し、見通しがもてるようにする

・　11 月学部研において、児童一人一人の将来像を想定した授業づくりについてと、キャリア教育の視点をふまえた授業について、アンケートを行った。以下にアンケート結果を示す。

① 児童一人一人の将来像や現在必要な力について授業研や普段の授業づくりで意識できたか

回答項目	人数(授業研)	意識した点(ねらい、内容など)　理由
かなりできた できた	12 人 （5 人）	・ 目標、内容、支援方法、日常の挨拶や会話、コミュニケーション手段などへ取り入れた ・ 検討したものを意識することはなかったが、検討したことにより児童の将来像について具体的に意識し考えるようになった
あまりできない できない	6 人 （0 人）	・ 常に目にするところに無かったので現状の課題にのみ目がいくようになった ・ 訪問の授業では直接意識できなかった
分からない	0 人(1 人)	

② 授業における各活動のねらいが明確になったか

回答項目	人数	理由
かなりなった なった	１４人	・ 横並びの記述のため、個々の活動に対応して記述できる ・ 活動と比較し結び付けて記述することでティームティーチング（以下ＴＴとする）でねらいを意識しやすくなった
あまりならない ならない	2 人	・ 記述する前からねらいの中にキャリア教育の視点が入っていたので、改めて明確になったとは言い難い
分からない	2 人	・ 全ての活動へキャリア教育の視点を記述することで、その授業の主たるねらいが分かりづらくなる

③ 略案の様式を変更したことで、キャリア教育の視点の記述がより具体的個別的になったか

回答項目	人数	理由
かなりなった なった	12 人	・ 各活動ごとに書くことで、より具体的になった ・ 欄が大きくなったので一人一人のねらいまで記述することができた
あまりならない ならない	4 人	・ 前の様式でも個別的に視点を記述していた。 ・ 個別的具体的にならなくてもよい　記述をすることで授業の主たるねらいが個別的具体的になれば良い
分からない	2 人	・ 個別的具体的に記述したが、それらを一人一人の児童に還元できたか分からない

④ キャリア教育の視点を記述する際、無理な当てはめや記述のしづらさはあったか

回答項目	人数	理由
かなりあった あった	9 人	・ 項目が分かりづらい ・ 解説を見ずその単語のイメージで記述したことがあった ・ 生活的な内容や余暇的な内容の授業は記述がしづらい
あまりない ない	4 人	・ 用語を確認するためにキャリアプランニングマトリックスの表を確認したが、内容を言いかえれば良かったのでさほど無理は感じなかった
分からない	0 人	

⑤ キャリア教育の視点を略案に記述することは、児童の将来像を想定したより良い授業を作るために有効か

回答項目	人数	理由
かなり有効 有効	15 人	・ 記述をすることで将来の姿を意識することができた ・ マトリックスを見ることで、中学部高等部ではどのように発達するか分かり、現段階がどこにあるか把握できた ・ 現在の活動が将来のどんな活動に有効か想定することができた ・ ＴＴで共通理解をもって授業を行うことができる
あまり有効でない 有効でない	1 人	・ 略案はＴＴの共通理解を図るために配布するものであるため、現在の形では略案が出ない場合は想定できないのではないか ・ 視点を記述する際マトリックスの小学部の部分しか見ていないので、将来像を想定しているとは言い難い
分からない	2 人	・ いちいちマトリックスを確認するのは負担に感じるひともいるのではないか　一人一人のキャリア教育の視点でのニーズや内容を考える必要がある

b　成果

- 授業づくりにおいて活動や目標、支援方法に児童の将来像を想定した内容を取り入れることができた。
- キャリア教育の視点を活動ごとに記述することで、各活動のねらいを具体的にすることができた。またＴＴで共通理解を図ることができた。
- 現在の活動が児童の将来どのように役立つか意識することができた。

c　課題

- キャリア教育の視点を略案に記述する際、名称の語感、イメージだけで記述することがある。
- 略案を作成しない普段の授業で、児童の将来像やキャリア教育の視点でのニーズを意識し取り入れる方法を検討する必要がある。
- キャリア教育の視点を活動ごとに記述することで、授業の主たるねらいがぼやけてしまう。

6　研究のまとめ

（1）　研究の成果

ア　一人一人の児童の将来像や将来像達成のために必要な力を検討したこと

児童の将来像などを授業の目標、内容、支援方法などに取り入れることができた。さらに児童への日常的な挨拶の指導、コミュニケーション手段へ反映することができた事項もある。

→現在の授業や児童への指導支援方法の意味や意義を再確認し、発展的に取り組むことができた。

イ キャリア教育の視点を略案に記述すること

授業における各活動のねらいが明確になった。各活動のねらいを T2 以下の職員へ明確に伝えることができ、共通理解をもって授業を行うことができるようになった。

→授業のねらいや、授業者の願い、各活動の意義を共有することができた。

ウ　研究全体を通して

本研究の大きな成果として、児童や授業の目標、支援、内容の意義を具体的に共有できたこと、小学部段階におけるキャリア教育の在り方について個々の職員が考えるきっかけができたことが挙げられる。

よりよい授業づくりを行うには、授業の目標、内容、支援について発展性をもち改善していく必要がある。日常的に児童の将来像や必要な力、授業について複数の職員で複数の視点（キャリア教育の観点、児童の将来像の観点など）から話し合う習慣がより良い授業づくりにつながると考える。

（2）　研究の課題

今後の課題として主に以下の 2 点が挙げられる。

ア　児童の将来像や現在必要な力､及びキャリア教育の視点を授業及び指導へ日常的に生かす方法の確立。

児童の将来像や現在必要な力を日常の指導へ反映する機会は､職員によりばらつきがある。そこで今後は検討した結果を校内 Web 上など職員が目にしやすい場所へ掲示する。また、保護者との面談の際や児童の支援方法検討の際に、作成した将来像を参考資料とするなど、有効な活用方法を検討する必要がある。さらに、今回検討しなかった児童に関しても、担任などが一人一人の児童の将来像を具体的に検討する必要がある。

なお、来年度もキャリア教育の視点を記述する略案様式を校内 web 上に掲載し、職員が使用できるようにする。略案様式とともにキャリアプランニングマト

リックスとキャリア教育の観点解説を掲示し、キャリア教育の視点に関する職員の理解を図る。授業における主たるねらいを明確にするため、キャリア教育の視点の記述は３点ほどにし、主たるねらいには二重丸を付け、さらなる共通理解を図ることとする。

イ　ＴＴの職員が日常的に授業改善に参加するための方法の検討

本研究では、月一回のワークショップ型授業研究会により複数の職員が授業改善に参加することができた。今後も略案を活用することで授業者同士が共通理解をもって授業を行うことができると考える。さらに、より良い授業づくりをするため、日常的に授業者間で授業内容について話し合ったり児童の目標の達成状況などを検討したりする必要がある。そのため、授業者間で日常的に検討する場を設けたり、児童の目標の達成状況を把握したりする手段や方法を確立する必要がある。

資料１　　高等部アンケート回答

問：小学部卒業段階で身に付けさせてほしい力は何ですか。

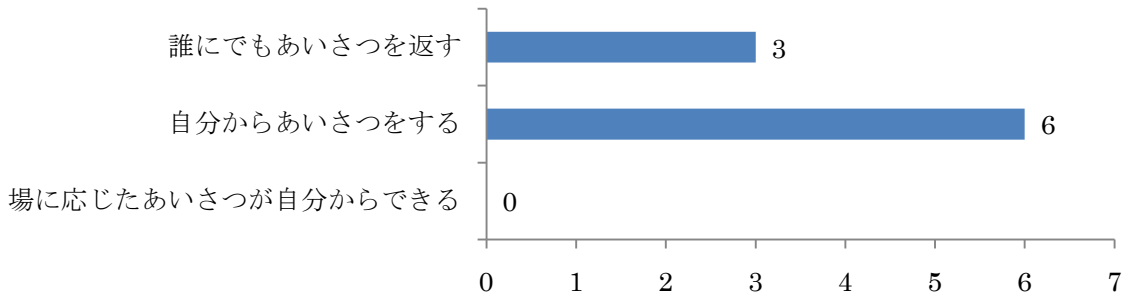
☆・・・最も見に付けさせてほしい力　　○・・・その他

（１）　人間関係、コミュニケーション能力について
☆協同遊びができる（ルール、順番を守って） ☆みんなと一緒に行動する ☆挨拶、返事。分からないときたずねる。困ったときに助けを求める。ありがとう、ごめんなさいが言える。 ○場に応じた声の大きさ
（２）学習や作業を行う力について
☆一定の時間、同じ作業に一生懸命取り組める。 ☆（視覚支援、手本を見せるなどして）簡単な手順が分かり、自ら作業を進めようとする。 ○整理整頓、片付ける、清掃
（３）日常生活を行う力について
☆自分のことは自分でやろうとする態度 ☆生活習慣の確立（決まった時間に食事、決まった時間に寝る、まとまった睡眠時間） ○時間内に決められた量を残さず食べることができる（極端な好き嫌いは×） ○身の回りの物や人への関心
（４）余暇について
☆集中して楽しめる好きなこと、得意なこと、興味のあることがある。 ☆一定時間自分の好きなことをして一人で過ごすことができる。 ○自分の好きなこと、好きな物を選ぶことができる（選択する力）
（５）その他、必要と思われる力について
子どもが力を付けるためには、保護者の協力が必要です。特に小学部段階からの保護者との連携は重要と思います。高等部で感じるのは親が子供の成長を十分サポートしていない（実は親が思っている以上に子どもは大人になろうとしている場合が多い）。常に生活年齢を意識した生活を送ってもらうよう小さいときからの親指導も必要と思います。→自立への意識付け。

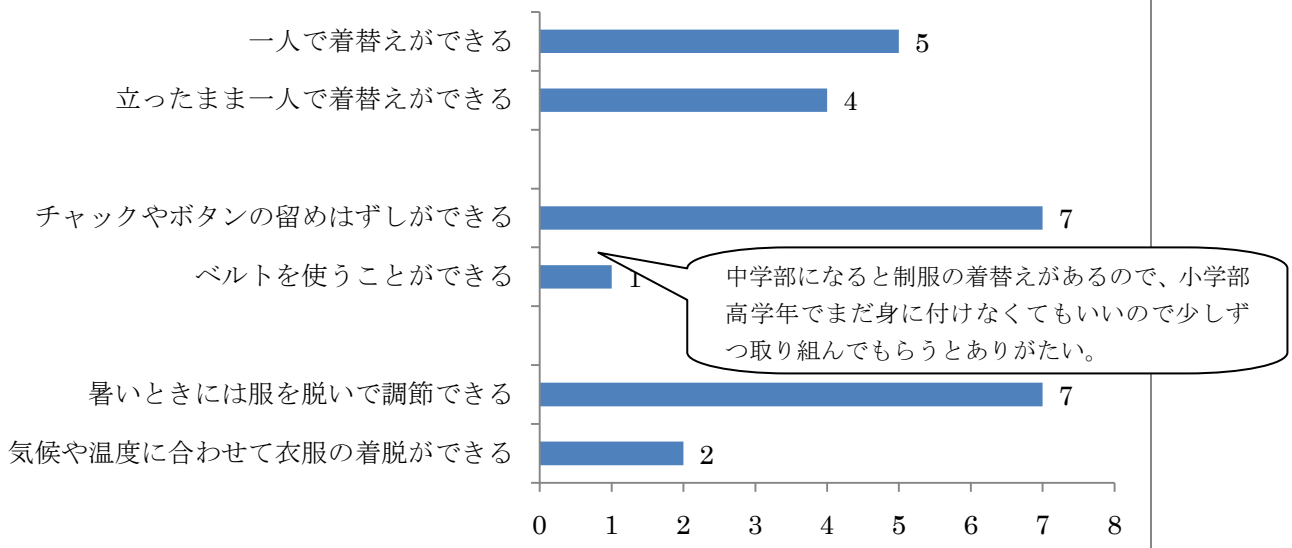
資料１　　中学部アンケート回答

問：小学部卒業段階において最低限身に付けさせてほしい力は次のうちどれですか。
あてはまるものに丸を付けてください。

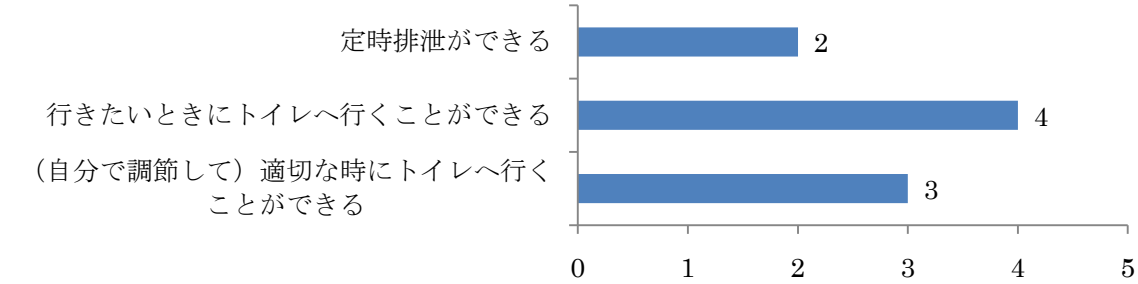
あいさつ



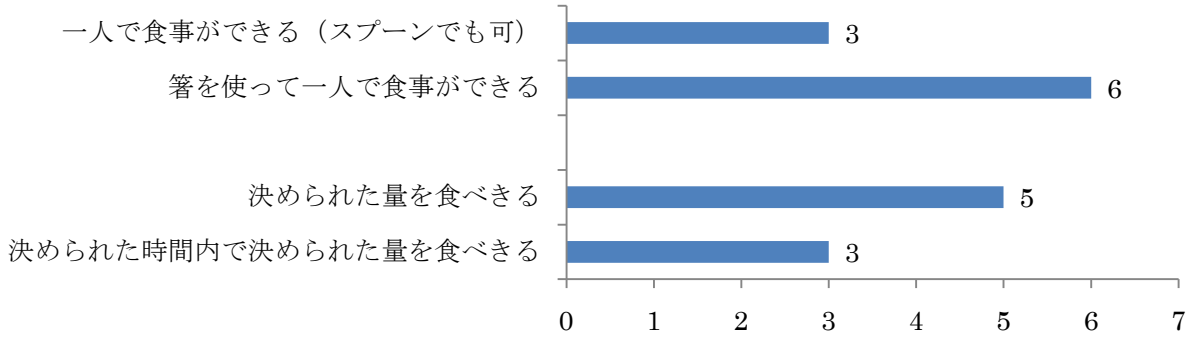
着替え（各１つずつ）



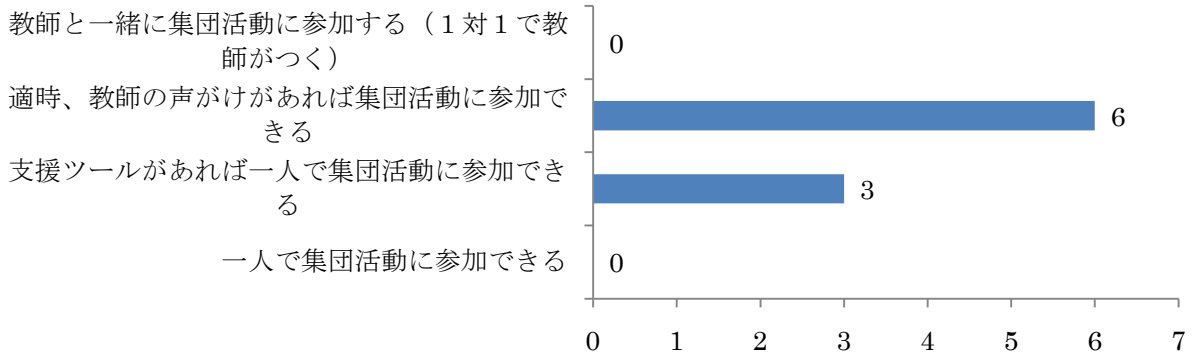
排泄



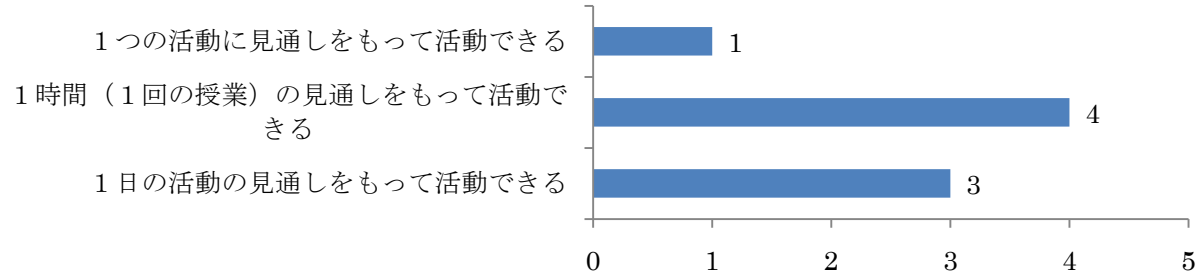
食事（各１つずつ）



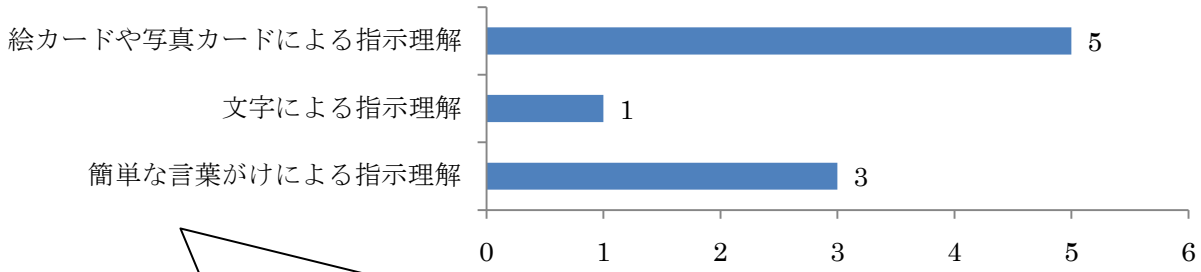
集団参加



見通し

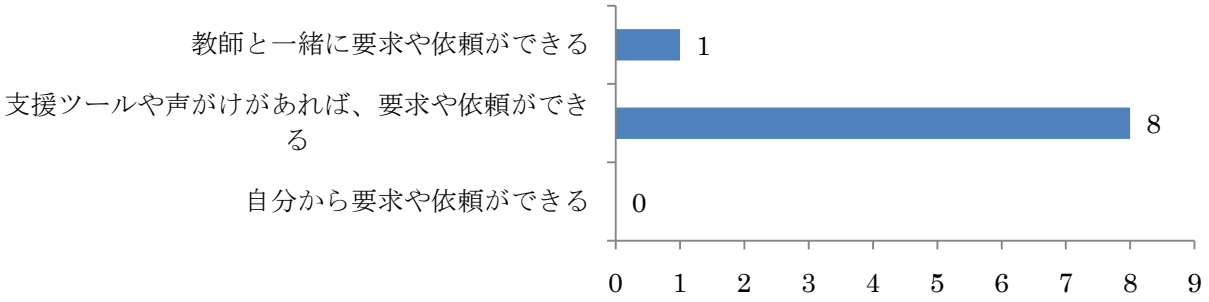


指示理解

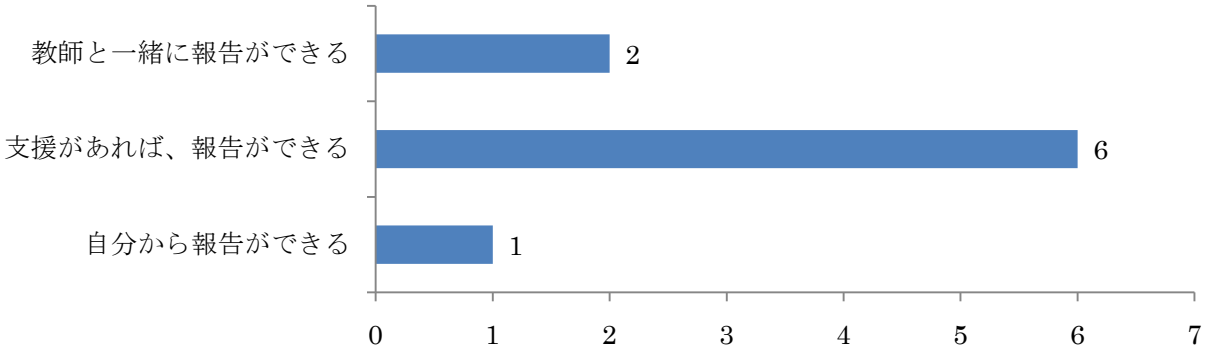


・児童の実態によって違うと思うので、指示理解できる方法（絵 or 写真 or 文字 or 言葉）が確立されているといい。
・実態によるので何とも・・・いずれ必要なことが理解できればいい。

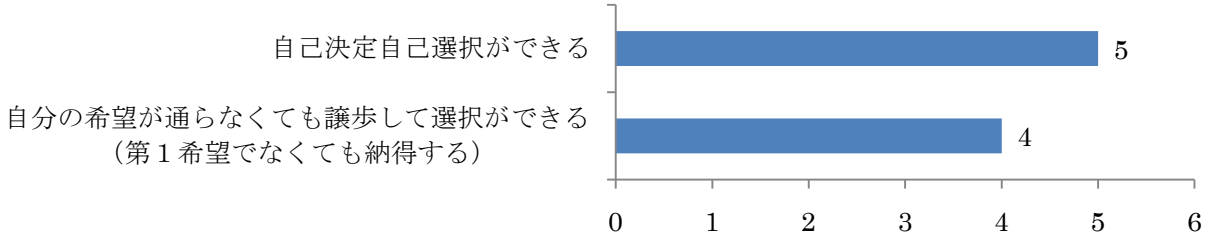
要求の表現



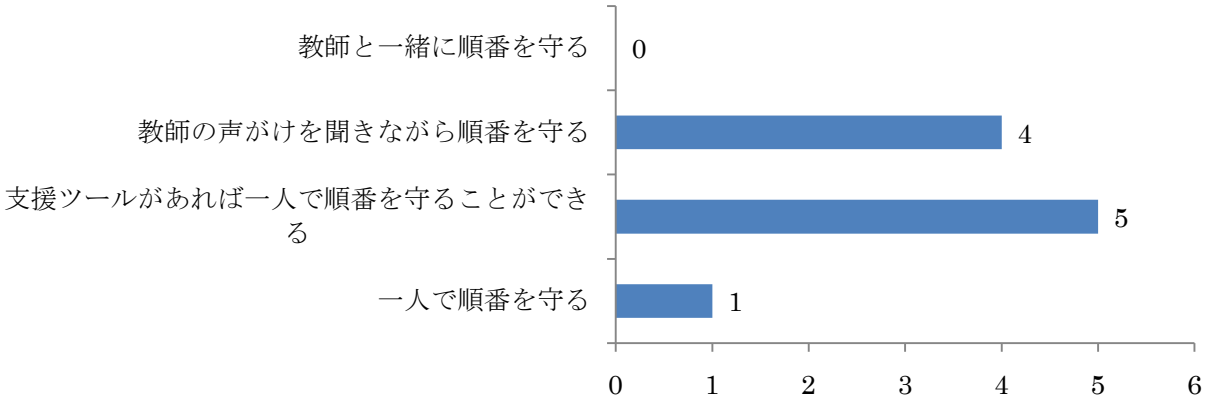
報告



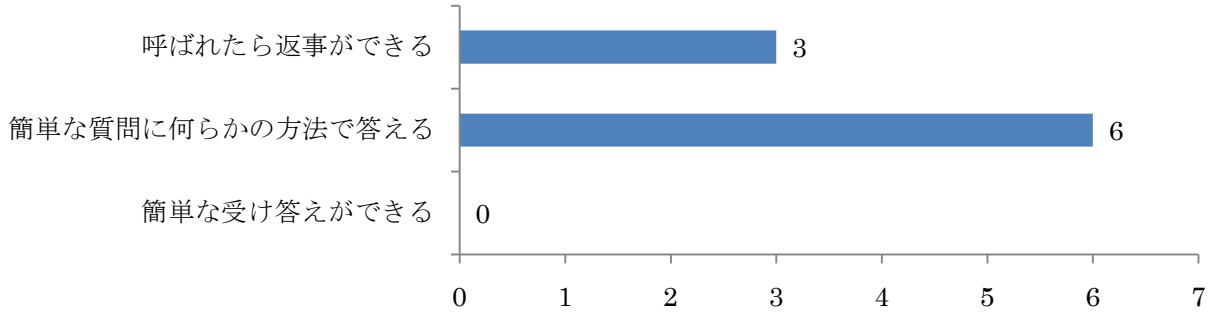
選択



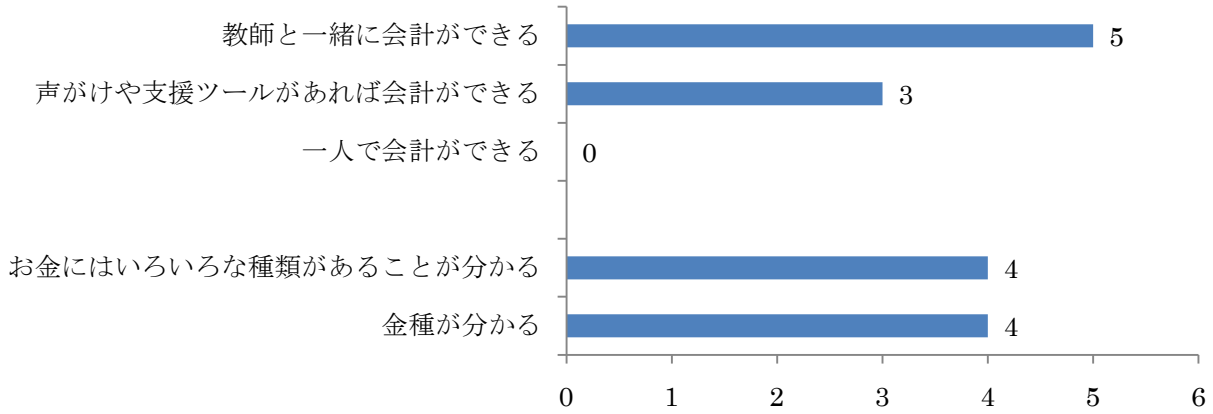
順番



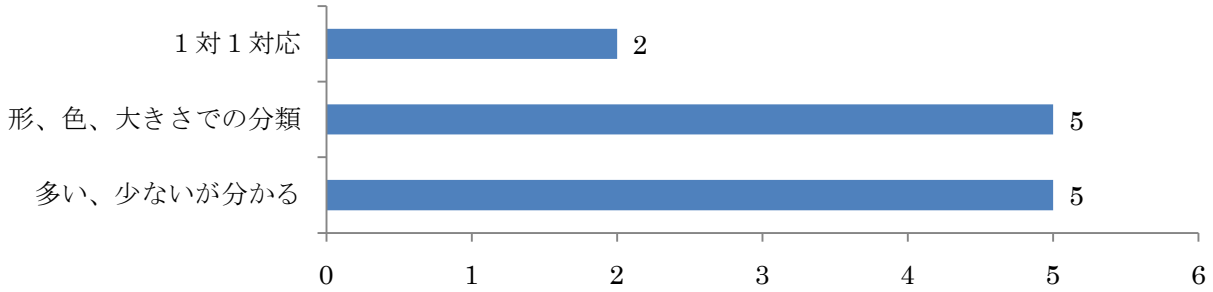
やりとり



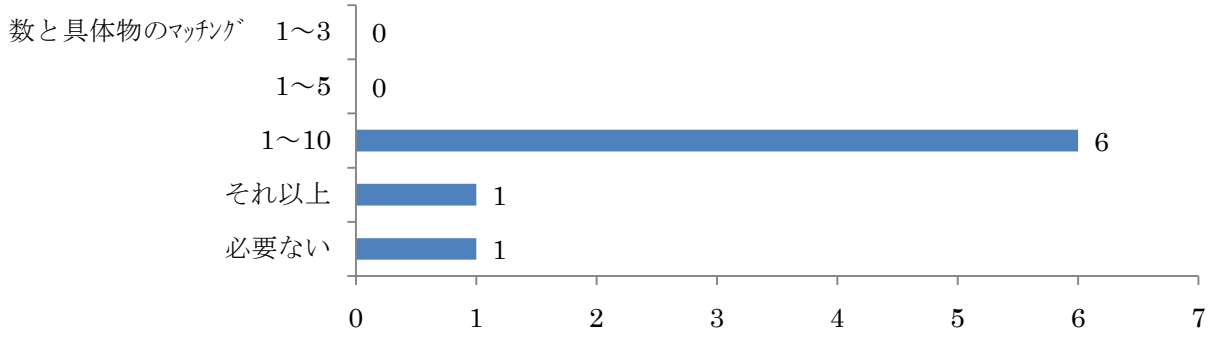
金銭の取り扱い（各１つずつ）



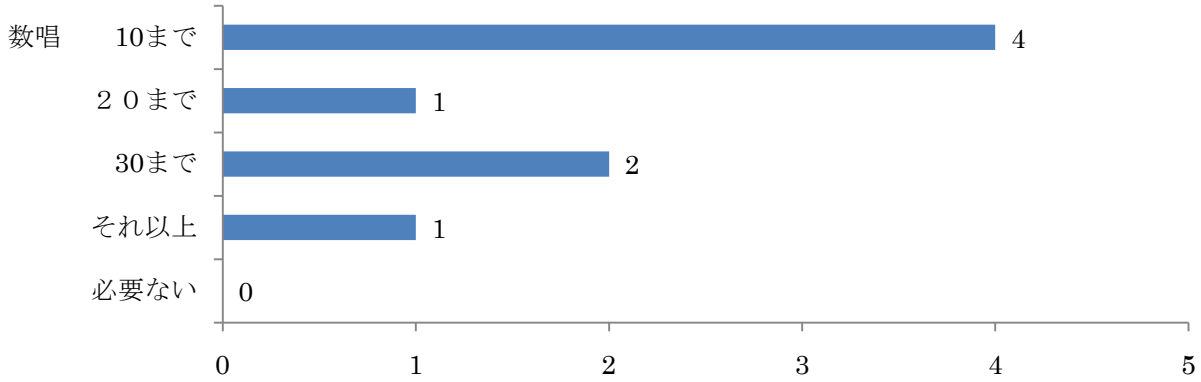
数概念（複数選択可）



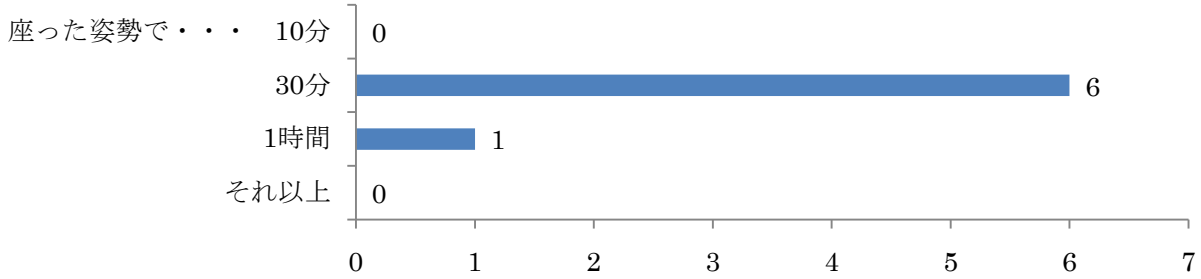
数概念



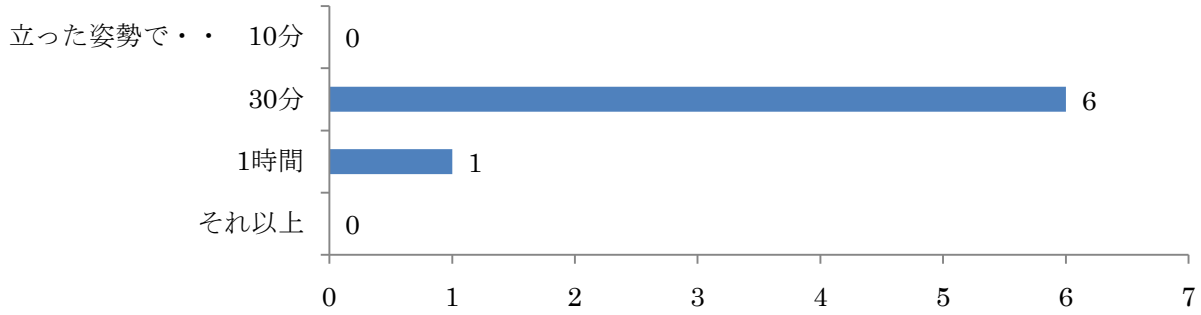
数概念



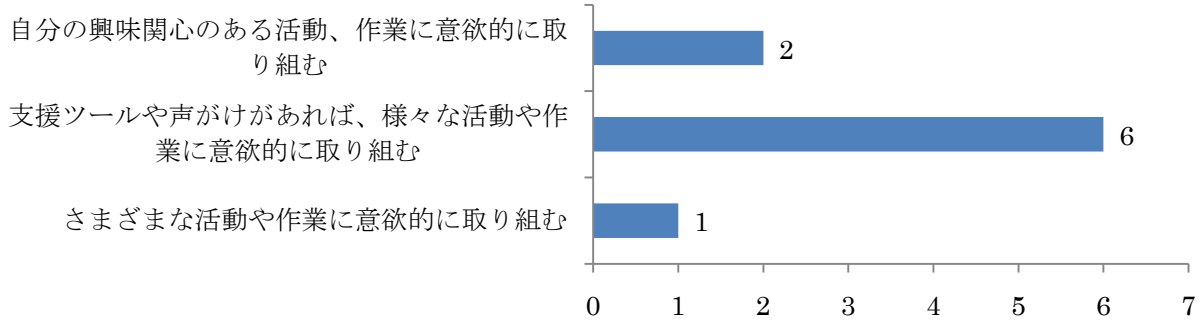
作業の持続性

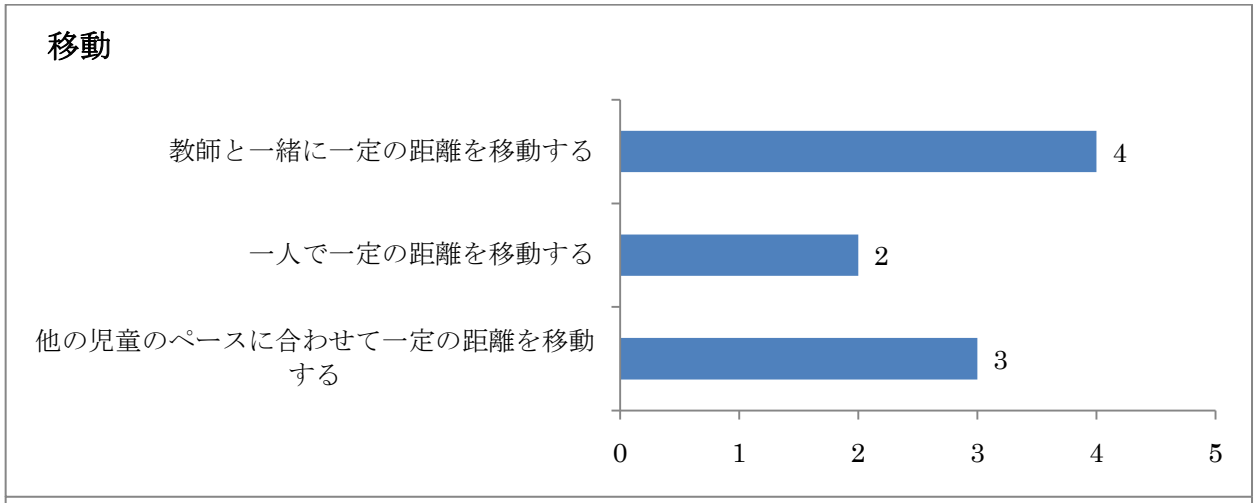


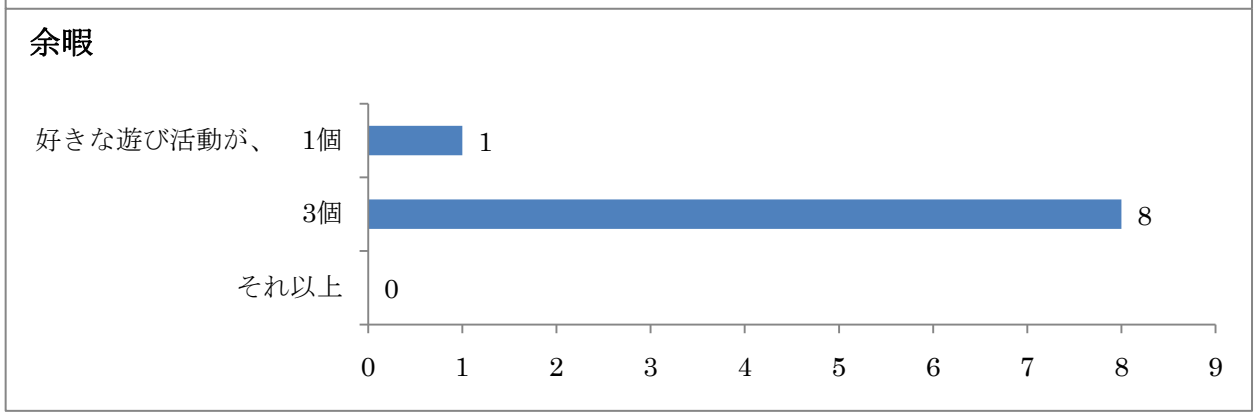
作業の持続性



意欲




移動
教師と一緒に一定の距離を移動する
一人で一定の距離を移動する
他の児童のペースに合わせて一定の距離を移動する
4
2
3
0
1
2
3
4
5


余暇
好きな遊び活動が、
1個
3個
それ以上
1
8
0
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9

資料2　A児	ワーク【一般就労】				ライフ			
高等部卒業後	・作業の連絡、報告をする。	・周囲の人たちと仲良く過ごす。	・1日作業する。		・一人でビデオ、DVD、ゲームを借りる。買い物する。 ・一人で出かける。		・家事を分担する。	
小学部高学年ごろ	・文章で話す。	・素直に聞き入れる。	・45分間作業できる集中力を身に付ける。		・自力登校 （中学部ごろ）	・所持金内で買い物をする。	（・ゲームの時間を減らす） ・家の手伝いをする。	
今	・定型文（挨拶、健康観察など）を照れずに話す。	・乱暴な言葉を使わない。	・丁寧に作業する。		・交通ルールを守って歩く。	・好きな物を選んで買う。 ・指定された物を探して買う。	・食器洗いや洗濯、掃除等を経験する。	

資料3

小学部　低学団　略案改善シート	授業名（単元名）　畑に行こう	9月14日（水）3k　場所　小学部の畑

●単元のねらい　・種まきや苗植え、野菜などの収穫をする。（A,B）
・畑の石や草、作業道具を運ぶ。（C,D）

●本時のねらい
・ハサミを使って、帝王貝細工の収穫をする。（A,B）
・畑の石を拾いバケツに入れて、石捨て場（草捨て場）まで運ぶ。（C,D）

授業の展開	キャリア教育の視点	支援	教材	評価 〇△×	前時からの改善点
〇挨拶		・大きな声で挨拶をするように声がけをする。（A） ・「礼」の声に合わせて、礼をするように促す。（B・C・D）			
〇作業の確認 ・貝細工の収穫（A・B） ・石拾い・運び（C・D）			・写真カード ・バケツ		
〇作業開始 A・B（貝細工**50**個収穫） ①農機具庫へハサミを取りに行く。 ②卵パックに貝細工を入れる。 ③1ケース（10個）収穫したらＴに報告する。（Ｔはチェックする） ④新しい卵パックを取りに行く。 ⑤②～④を繰り返す。 ⑥作業終了・後片付け	挨拶・清潔・身だしなみ 「自分から報告をしに行くことができる」 報告の方法 B・卵パックをＴの所に持って行き、お願いする。 A・卵パックをＴの所に持って行き「〇〇先生、お願いします」ときちんと言う。	・10個収穫するごとに、近くにいるＴへ報告しにいくように促す。 ・「収穫する花」と「収穫しない花」を写真で示す（前時） ・「収穫しない花」をパックに入れて報告に来たときは、間違いをＴと一緒に確認し、やり直すように伝える。 ・天候や児童の状態に応じて、小休止を取り、水分補給を行う。	・ハサミ ・卵パック ・ケース ・缶電池 ・写真カード		・作業中、風で卵パックが飛ばないように缶電池（おもり）を付けた。
C・D（石拾い・石運び） ※交代で作業をする ※各自**3**回できたら作業終了 ①石を拾い、バケツに入れる。 ②10個ほど入れたら、石捨て場まで運ぶ。 ③バケツをＴに手渡し、石を捨てるようにお願いする。 ④バケツを持って、コンテナに座っている人にバケツを渡す。 ⑤マグネットを取り、ケースに入れる。 ⑥コンテナに座り、休憩する。	習慣形成 「石を拾うことができる」 「バケツを運ぶことができる」 （C・D）	・Ｔは、なるべく大きめで目立つ石を、児童の足下辺りに置く。 ・Ｔも一緒に石拾いを行い、児童が持っているバケツに入れる。 ・児童がバケツを運ぶときは、Ｔは石捨て場（又はコンテナの脇）に立って児童を待つ。 児童が止まってしまったときは、声がけをする。 ・天候や児童の状態に応じて、休憩中に水分補給を行う。	・バケツ ・コンテナ ・ホワイトボード ・マグネット ・ケース （マグネット入れ）		・1回の作業が終わるごとに、マグネットを取るようにする。 ・コンテナ（いす）の置き場所と石捨て場が、直線上になるようにした。
〇作業終了・挨拶		・大きな声で挨拶をするように声がけをする。（A） ・「礼」の声に合わせて、礼をするように促す。（B・C・D）			

その他

中学部

１　主題

「生徒一人一人の自立と社会参加を目指した授業づくり」
～キャリア教育の視点を取り入れた授業の充実を目指して～

２　研究主題設定の理由

中学部では、『主体的な行動を積み重ね、他人からの適切な支援を受けつつ、自分らしさを保ちながら地域社会で生きていくこと』[1)] を「自立と社会参加」と捉えている。学部の作業学習（班作業・農作業）において働く意欲や関心、態度の育成や、基本的な知識や技能の習得を目指した学習に取り組んでいる。また、生活単元学習や校外学習では、社会参加に向けて公共の交通機関の利用や地域の公共施設の利用について実践的な経験を積み重ねるなど、教育活動全体を通して将来の「自立と社会参加」に向けた学習に取り組んでいる。

近年、生徒が社会人・職業人として自立していくためには発達段階に応じて体系的・計画的にキャリア教育を推進していくことが有効だといわれている。生徒の「キャリア」を形成する支援を行うためには、教育活動全体の中で生徒が個々にふさわしい役割をもち、目標や希望を抱き、やり遂げる充実感、達成感がもてるようにする状況づくりに努めるとともに、一人一人の学習と経験の積み重ねが職業生活（社会生活）に結び付く教育活動の系統性を明確にしていくことが重要とされている[2)]。

中学部では、先に述べた作業学習やその他の授業などで職業観・勤労観を育成するための指導や支援を行っているが、教育活動全体にキャリア教育の視点を取り入れることで、より一層、生徒の「自立と社会参加」を目指した指導の充実が図られると考えた。

そこで、本研究において学部の教育活動全体をキャリア教育の範囲と捉え、それぞれの教育活動がもつ意味を確認し、キャリア発達の視点から諸活動を関連づけて効果的なものにする。そして授業実践を行い、改善していくことが中学部における「自立と社会参加」に向けた取り組みにつながると考えた。

３　研究の目的

生徒の「自立と社会参加」に向けて、現在行われている学習活動をキャリア発達の観点から分析的に捉える。そして授業実践においてキャリア教育にかかわるねらいを明確に位置付け、生徒が主体的に学習活動に取り組めるような支援の在り方を検討し、実践を重ねることで生徒一人一人のキャリア発達を促す授業の改善・充実を目指す。

４　研究の内容と方法

・１年次に作成した「学習活動をキャリア発達の観点から捉え直した表」の「今後取り組みが考えられる学習活動」の内容を参考にしながら、生徒のキャリア発達を促すための授業の在り方について検討し、実践する。
・授業実践にあたっては、本校中学部生徒の発達段階や障がい特性に応じた、キャリア発達にかかわる指導目標及び指導内容を明確にし、職員間で共通理解を図りながら進める。

５　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4	・今年度の取り組みについて	4	・２年次の取り組みについて ・全体研究会①
5	・今年度の取り組みについて ・全体研究会①	5	・授業実践
6	（１）学習活動についてキャリア発達の観点から捉え直す （２）授業実践	6	・中学部研究授業
7	・中学部研究授業	7	
8		8	
9		9	
10		10	
11		11	・研究のまとめ
12		12	・全体研究会②
1	・１年次の取り組みのまとめ	1	・研究集録作成
2	・１年次の取り組みのまとめ ・全体研究会②	2	
3		3	

６　研究実践

（１）　１年次の実践

学部の教育活動全体をキャリア教育の範囲と捉え、学習活動の捉え直しと整理・分析、授業実践を行った。

【１年次の成果】

ア　キャリア教育にかかわる学習活動の捉え直しと整理・分析について

・「キャリアプランニング・マトリックス（試案）観点解説」を参考に学部全体でキャリア発達について理解を深めることができた。

・中学部で行われている学習活動をキャリア発達にかかわる４つの領域・１６観点ごとに整理し表にまとめることができた。

・「単元における観点位置付けシート」を用いて、中学部の授業（道徳を除く全ての授業）をキャリア発達の観点から捉え直し集計を行った。その分析から学部の学習活動とキャリア発達の各観点とのかかわりについて理解を深めることができた。

イ　授業実践について

・授業観察による「気づき」をもとに、学部研究会において「生徒が主体的に取り組めるような支援の在り方」を検討し、指導目標・指導（支援）内容・評価について工夫し実践を重ねることで授業の改善・充実を図ることができた。

・指導案（略案）にキャリア教育の視点を記載することで、キャリア発達の観点から授業を捉え直すことができた。

【１年次の課題】

ア　キャリア教育にかかわる学習活動の捉え直しと整理・分析について

・「単元における観点位置付けシート」の集計、「学習活動をキャリア発達の観点から捉え直した表」の分析から、１６観点の中で学部として取り組みが少ないと思われる観点があった。この点については「学習活動をキャリア発達の観点から捉え直した表」にある「今後取り組みが考えられる学習活動」の内容を参考に検討していく必要がある。

・「単元における観点位置付けシート」の記入にあたり、授業をキャリア教育の視点で見直す際に、単元がどの観点にあてはまるか迷うことが多々見られた。キャリア教育を推進していくために、本校中学部の発達段階や障がい特性に応じた指導目標及び指導内容などの検討が必要である。

イ　授業実践について

・授業をキャリア教育の視点で捉え直すことはできたが、キャリア発達にかかわる指導目標を設定し、重点的に取り組むまでには至らなかった。生徒一人一人のキャリア発達を促すためにねらいを明確にし、授業実践に取り組んでいくことが必要である。

（２）　２年次の実践

『生活単元学習「ハッピーライフ～楽しく充実した将来のために～」の取組』

ア　取組にあたって

１年次の研究実践において「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」にある『中学部段階において育てたい力』１６系列の内、本校中学部では「夢や希望（将来設計能力）」「進路計画（将来設計能力）」「自己調整（意思決定能力）」についてキャリア発達を促すための学習の取り組みが少ないことが分かった。「キャリアプランニングマトリックス（試案）観点解説・改訂版」では「夢や希望（将来設計能力）」について「将来の職業や生活について、児童生徒自らが夢や希望をもつことであり、願いを実現するためにはどうしたらよいか考える力を育てるための観点であり、キャリア発達を支える中核をなすものである」とある。そこで前述の『キャリア発達を支える中核をなすもの』に注目し、今年度は生徒一人一人のキャリア発達をさらに促していくために、「夢や希望（将来設計能力）」にかかわる学習について指導目標を設定し重点的に取り組むこととした。単元名については生徒が将来について『明るい』『楽しい』『充実している』など前向きなイメージをもてるように「ハッピーライフ」とした。

イ　単元のねらいについて

a　自分を知ることができる。（好きなこと、得意なこと）

b　身近な仕事に関心をもつことができる。

c　将来の夢や希望、憧れの職業をもつことができる。

d　将来に向けて中学部段階での目標をもつことができる。

ウ　指導案について

・指導案（略案）については、各授業においてキャリア発達にかかわる指導目標を明確に設定し職員間で共通理解を図ることとした。また、各授業に含まれる「キャリアプランニングマトリックス（試案）」の各観点を確認することと、授業改善を図ることを目的とし「授業における観点位置付け・授業改善シート（国立特別支援教育総合研究所）」を使用することとした。

キャリア発達段階・内容表（試案）の活用による「授業における観点位置付け・授業改善シート」

学部・学年	中学部・1～3学年	場所	視聴覚室	本時の目標	○友だちの夢や先生たちが描いていた夢を知り、さまざまな夢や考え方があることがわかる。 →自己理解・他者理解（人間関係形成能力） ○友だちの夢や先生たちが描いていた夢を知り、将来について夢や希望、憧れをもつことができる。 →夢や希望（将来設計能力）
教科名	生活単元学習	指導者	原　他　名		
単元名	「将来の夢や希望について考えよう」				

学習内容	支援と指導上の留意点	キャリア発達段階・内容表（試案）主たる観点	キャリア発達段階・内容表（試案）関連する観点	気付き 次時授業改善点	気付き 教育課程への反映	気付き 生活全体への反映
導入 1.「ハッピーライフ」について、どんなことを学習していくのか説明を聞く。 2. 本時の学習「将来の夢や希望について考えよう」の説明を聞く。	授業計画を記載した模造紙を用意し、見通しがもてるようにする。 授業計画をもとに今日の授業について簡単に説明する。	自己理解 他者理解 《人間》 夢や希望 《将来》	情報収集と活用 《情報》	キャリアの観点をより充実させるための改善点を記入	授業の成果が他の授業の目標・内容・方法等に反映できる、または関連していると考えられる事項について記入	授業の成果が、家庭・地域等と連携した活動等に反映できると考えられる事項を記入
展開 3. 友達の「得意なこと」「希望」「願い」「やってみたいこと」「将来の夢」を知る。 4. 先生たちの描いていた夢を知る。	生徒の写真やイラストをもちいたパワーポイントを使用し、イメージがもてるようにする。 紹介する教師が各々の部分を担当し、興味・関心をもって説明を聞けるようにする。					

エ　評価について

・各授業終了後、行われた授業について職員間で用紙を回覧し、『知識・理解・スキル』『意欲・関心・態度』『目標や学習内容』について結果を記入する方法で行った。

オ　授業実践にあたって大切にしたこと

・単元のねらいから、導入については「働くこと」「仕事とは」という観点からではなく「夢や希望」「自分」について考えることから学習することとした。「夢や希望」について考えることが難しい生徒については「好きなこと、得意なこと」を友達同士で出し合ったり、教師と一緒に考えたりして「夢や希望」に発展していくことができるようにしたいと考えた。

・意欲や期待感をもって授業に取り組むことができるように、友達や先輩、修学旅行先で出会う人々、学校内で働く人々など、身近で親近感のもてる人たちを対象として授業を進めることにした。

・生徒が主体性をもって学習できるように、活動場面の中で自ら選択できる場面や実際に体験ができる場面を設定するようにした。また、集団での学習が苦手な生徒や活動に見通しがもちにくい生徒が学習に参加できるように、生徒の適性に合った役割分担を検討し、授業を行うこととした。

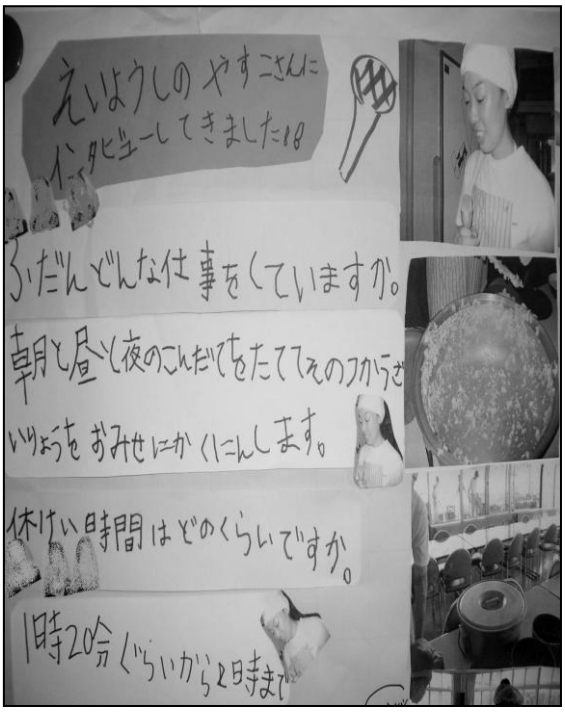
・調べ学習で人とかかわったり、先輩を招待して話を聞いたりする機会があることから、マナーやあいさつもキャリア発達に関連する観点として捉え、各授業で意識的に取り組むこととした。

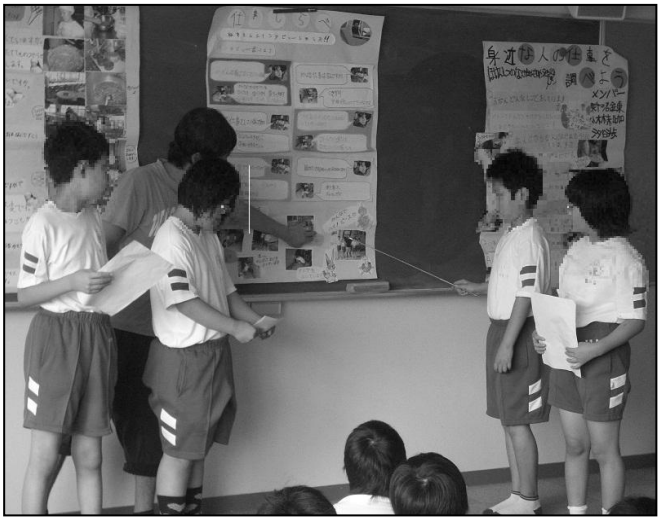
カ　授業実践

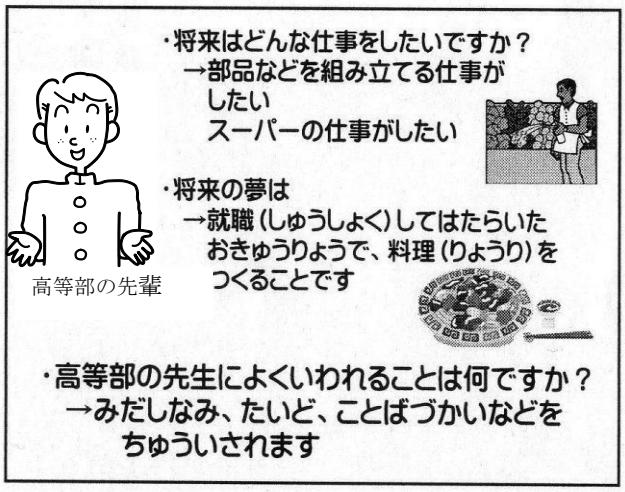
「ハッピーライフ」授業計画				
	学習のテーマ （小単元）	学習内容	集団	時間数
1	将来の夢や希望について考えよう	①アンケート記入	学級	1
		②・友達の夢を知る ・先生達が小さい頃の夢	学部	1
2	身近にいる人の仕事を調べよう	①調べる　校内・・１年生 卒業した先輩（福祉の里）・・２年生 校外（修学旅行先）・・３年生	学年	2
		②まとめる	学年	2
		③発表する		1
3	ようこそ先輩	①高等部の先輩	学部	1
		②卒業した先輩※本人招待、 VTR	学部	1
4	将来の夢・目標	・夢について再度考えてみよう ・今できること、目標（チェックリストを使って）	学部	1
計　１０時間				

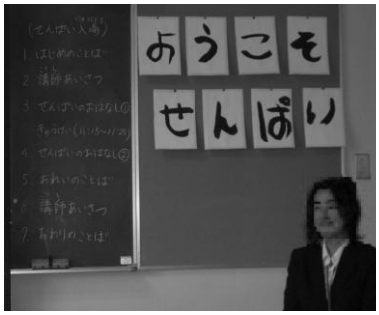
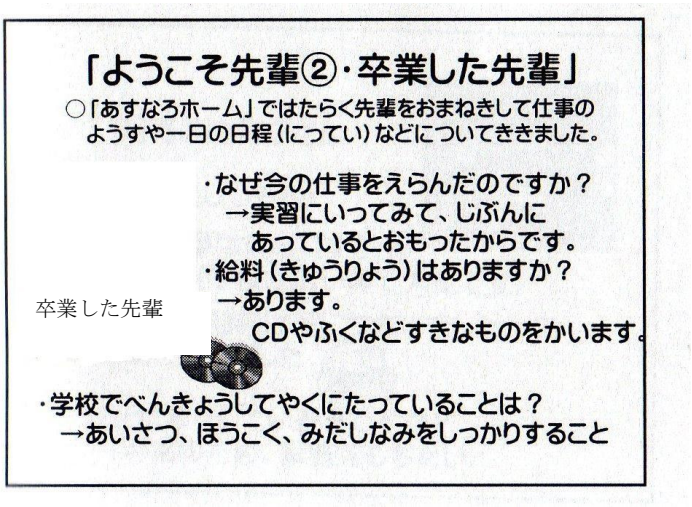
小単元１	「将来の夢や希望について考えよう②」
目標	○友達の夢や先生たちが描いていた夢を知り、様々な夢や考え方があることが分かる。 →自己理解・他者理解（人間関係形成能力） ○友達の夢や先生達が描いていた夢を知り、将来について夢や希望、憧れをもつことができる。→夢や希望（将来設計能力）
内容	○友達の夢、先生達の小さい頃の夢を紹介する。
生徒の様子 （評価）	○関心・意欲・態度 ・キャビンアテンダントや介護士等、生徒が知らなかった職名が出てきたので興味深い様子で画像を見ていた。 ・自分の身近にいる人（友達・先生）の夢ということで、興味をもって集中して参加している生徒が多かった。 ・生徒の生き生きした笑顔が今後の「ハッピーライフ」に取り組む意欲につながっていた。
成果	・友達の夢だけではなく、教職員の小さい頃の夢も伝えたのは良かった。 ・色々な仕事があるということ、夢は変わってもいいということを生徒に伝えることができた。夢について選択肢を広げることができた。 ・自分の好きなこと、得意なことを改めて意識化し、それが将来の夢につながっているということの理解につなげることができた。 ・生徒によっては、将来の夢を前向きに考えることができるようになった。
課題	・このような授業が以前よりあれば、生徒たちが将来について考える機会が多かったのではないか。これからの継続した取り組みが必要である。

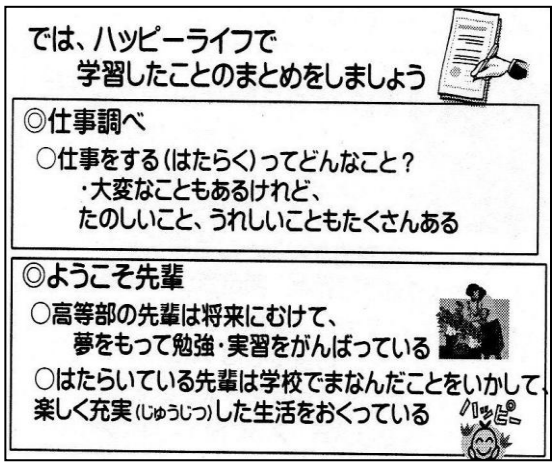
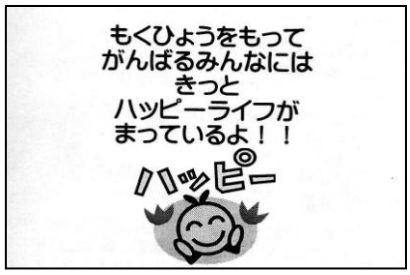
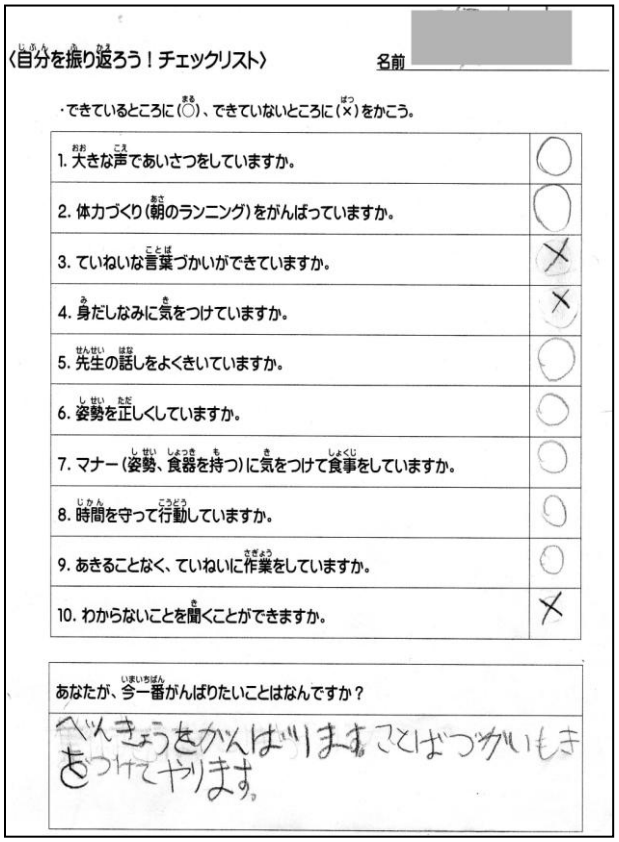
小単元２	「身近にいる人の仕事を調べよう　①調べる（校内・１年生）」
目標	○先生方の仕事内容などを聞き、校内でも様々な仕事があることが分かる。 →情報収集と活用（情報活用能力） ○適切な言葉や態度でインタビューや体験をすることができる。 →場に応じた言動（人間関係形成能力）
内容	○校内で仕事をする人に働くことについてインタビューする。 ○仕事体験をする。 仕事調べ（校内） ・栄養士さん ・保健室の先生 ・用務員さん 110 人分の健康診断票を書くことです。 仕事をしていて大変なことは何ですか？
生徒の様子（評価）	○知識・理解・スキル ・グループで決めた質問をインタビューすることができていた。 ・グループ内容に沿って、聞いたことを自分でプリントにメモすることができた。 ・グループ内で役割分担をし、質問内容をまとめることができた。 ○意欲・関心・態度 ・仕事体験（バスの水切り）をしている時に「大変だ」と言っている生徒がいた。仕事の大変さを少し感じることができたようだ。 ・仕事体験で、ごはんの釜が大きくてびっくりしていた。 ・救急セットの中身を見て、薬の種類や量について意見を出していた。 ・仕事見学、インタビュー、仕事体験を終えて帰ってきた時の生徒の様子は本当に満足していた。
成果	・実際に体験することで、生徒は仕事に対する大変さや面白さを感じることができた。 ・普段見られない仕事について知る良い機会だった。 ・生徒が自分たちで役割分担をするなど、主体性をもって活動できた。
課題	・インタビューする前に、インタビューの仕方や態度などを確認して行ったほうが良かった。

小単元２	「身近にいる人の仕事を調べよう　②まとめる（１年生）」
目標	○校内で働く人に聞いた話や体験を振り返り、写真や記録を見ながらまとめることができる。 →情報収集と活用（情報活用能力） ○グループ内で役割を分担し、模造紙にまとめることができる。 →協力・共同（人間関係形成能力）
内容	○調べたことをまとめる。 
生徒の様子（評価）	○知識・理解・スキル ・事前に質問を用意していたことで項目に沿ってまとめやすく、見やすい表を作ることができた。 ・全員で調べたことを模造紙にまとめることができた。 ・自分たちが撮った写真を見て振り返りができていた。 ○意欲・関心・態度 ・役割を明確にしたことで、全員が最後までやり遂げることができた。 ・生徒同士が協力してまとめることができた。
成果	・自分たちで調べてまとめたことで、学習をより深めることができた。
課題	・特になし

小単元２	「身近にいる人の仕事を調べよう　③発表する（１・２年生）」
目標	○発表を聞き、身近にはいろいろな職業の人がいてどんな仕事をしているか理解することができる。→情報収集と活用（情報活用能力） ○調べてまとめた事柄を他のグループや他学年の友達に伝わるように姿勢・態度・声の大きさ・話す速度に気を付けて発表することができる。→場に応じた言動（人間関係形成能力） ○自分の担当する箇所を理解して発表することができる。→役割の理解と働くことの意義（情報活用能力）
内容	○調べて、まとめたことをグループごとに発表する。  グループ ・栄養士さん ・保健室の先生 ・用務員さん ・卒業した先輩 （福祉の里内）
生徒の様子 （評価）	○意欲・関心・態度 ・発表する方も、聞く方も生き生きしていた。 ・自分たちの知っている人たちということもあり、興味をもって話を聞いているようだった。
成果	・調べたことを発表することにより、聞く人を意識することができ、発表を終えたときには達成感も得られとても良かった。 ・今までそんなに意識していなかった（かもしれない）身近な人、先輩たちの仕事を改めて「仕事」として捉えることにつなげることができた。 ・身近な人たちの仕事が分かり、仕事がどういうものなのか感じ取ることができた生徒もいる。
課題	・発表する態度は良かったが、聞く態度が良くない生徒がいた。 ・人前で発表することには慣れていないこともあり、掲示物の前に立ったりしていることがあった。

小単元３	「ようこそ先輩　①高等部の先輩」
目標	○高等部の先輩たちの様子を聞き、中学部卒業後の進路が分かる。 　→情報収集と活用（情報活用能力） ○自分たちの生活を振り返り、進路を見通して自己理解を深め、中学校生活でどんなことを学べばよいかを考えることができる。→進路計画（将来設計能力）
内容	○高等部の先輩をお招きし、高等部の生活や先輩について話を聞く。 ○終了後、先輩に礼状を書く。 
生徒の様子（評価）	○意欲・関心・態度 ・終了後に「先輩が来てくれて良かった～」と話す生徒がいた。 ・実際に高等部の先輩が目の前で質問に答えるというのは、生徒の目を引き付けていた。 ・高等部の学習の様子をビデオで見ることにより、言葉だけでは理解が難しい生徒も何か感じられたようだ。
成果	・授業を重ねるうちにだんだん授業を受ける態度が良くなってきた。 　→ハッピーライフ（キャリア）について、イメージや関心が出てきた。 ・事前に各学級で取り組んだ高等部への質問事項は高等部への興味やあこがれの気持ちをもって授業に参加する態度につなげることができた。
課題	・高等部には教科（国語・数学）がないなど、教育課程（クラブとか選択とか）が違うということを生徒はイメージしづらかったようだ。先輩や高等部について、良い気づきの質問が多かったので、その点についてもう少し補足があれば更に良かった。

小単元３	「ようこそ先輩　②卒業した先輩」
目標	○卒業生の仕事の話を聞いたり、ビデオ（仕事の様子）を見たりすることで仕事や働く人（こと）について興味関心をもつことができる。→夢や希望、進路計画（将来設計能力） ○適切な言葉遣いや態度で質問することができる。 →意思表現、場に応じた言動（人間関係形成能力）
内容	○卒業した先輩を招待し、仕事の様子や先輩の生活について話を聞く。  
生徒の様子（評価）	○意欲・関心・態度 ・知っている先輩の話ということで、意欲的に聞いていた。 ・実際に働いている姿をビデオで見て、イメージをもちやすかったようだ。 ・給料の使い道に関心が大きかった。 ・先輩が持ってきてくれた販売製品に興味をもち、先輩に質問などをしていた。
成果	・講師である先輩の話し方や態度がすばらしく、生徒にとって手本や憧れの対象となりうるものだった。 ・一般企業で働く先輩の話もあり、作業所以外の働く現場についても学ぶことができて良かった。
課題	・聞く態度が良くなかった。普段の授業から話を聞く態度についての力を付けていく必要がある。 ・年に一度はこういう学習の機会があっても良い。進路見学会などを工夫し、先輩の話を聞くのも良いのではないか。

小単元４	「将来の夢・目標」
目標	○これまでの授業を振り返り、仕事をすることの必要性や仕事をすることの良さを理解することができる。→役割の理解と働くことの意義（情報活用能力） ○授業を振り返り、仕事へのあこがれや夢をもつことができる→夢や希望（将来設計能力） ○チェックリストを使用して現在の自分を振り返り、目標をもつことができる。 →肯定的な自己評価（意志決定能力）
内容	○これまでの授業から、仕事をすることの必要性や仕事をすることの良さを理解する。 ○チェックリストに記入する。  では、ハッピーライフで 学習したことのまとめをしましょう ◎仕事調べ ○仕事をする（はたらく）ってどんなこと？ ・大変なこともあるけれど、 たのしいこと、うれしいこともたくさんある ◎ようこそ先輩 ○高等部の先輩は将来にむけて、 夢をもって勉強・実習をがんばっている ○はたらいている先輩は学校でまなんだことをいかして、 楽しく充実（じゅうじつ）した生活をおくっている  もくひょうをもって がんばるみんなには きっと ハッピーライフが まっているよ！！ ハッピー  〈自分を振り返ろう！チェックリスト〉 名前 ・できているところに（○）、できていないところに（×）をかこう。 1. 大きな声であいさつをしていますか。 ○ 2. 体力づくり（朝のランニング）をがんばっていますか。 ○ 3. ていねいな言葉づかいができていますか。 × 4. 身だしなみに気をつけていますか。 × 5. 先生の話しをよくきいていますか。 ○ 6. 姿勢を正しくしていますか。 ○ 7. マナー（姿勢、食器を持つ）に気をつけて食事をしていますか。 ○ 8. 時間を守って行動していますか。 ○ 9. あきることなく、ていねいに作業をしていますか。 ○ 10. わからないことを聞くことができますか。 × あなたが、今一番がんばりたいことはなんですか？ べんきょうをがんばります。ことばづかいもきをつけてやります。
生徒の様子（評価）	○知識・理解・スキル ・チェックリストは一つ一つの項目について自分を振り返りながら書いていた。 ・自分が実際に体験したこと、聞いたことはよく覚えていた。 ・自己評価「×」と分かっていても「○」と書いていた。
成果	・この授業を行ったことで、生徒が仕事について意識することにつなげることができた。 ・単発ではなかなかイメージしにくい学習なので、こうして多角的に継続した授業は良い学習だった。継続は力である。
課題	・適切な自己評価をできる生徒は少ない。 ・「×」を書くことに抵抗がある生徒がいた。他者評価が必要な場合もある。

７　研究のまとめ

（１）　研究の成果

昨年度の研究課題を受け、「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」にある『中学部段階において育てたい力』１６系列の内の「夢や希望」ついて、キャリア発達にかかわる指導目標・指導内容を検討し、職員間で共通理解を図りながら授業実践を行うことができた。

ア　単元のねらいについて

ａ　自分を知ることができる（好きなこと、得意なこと）。

導入部分で好きなことや得意なこと、将来の夢について自分で考えたり、先生や友達と話しあったりして、アンケートに記入することができた。また、友達の夢や教職員の小さい頃の夢を知ることで、将来への夢や希望について考えるきっかけを作ることができた。

ｂ　身近な仕事に関心をもつことができる。

仕事調べや仕事体験、まとめと発表を通して、身近にいる人がどんな仕事をしているか理解したり、関心をもったりできるようになった。

ｃ　将来の夢や希望、憧れの職業をもつことができる。

仕事調べや仕事体験、先輩の話を聞く学習を通して、働くことや将来へのイメージを膨らませることができるようになり、少しずつではあるが将来への希望や期待感をもつことができるようになっていった。

ｄ　将来に向けて中学部段階での目標をもつことができる。

学習のまとめではこれまでの学習を振り返り、働くことの楽しさ・喜び・大変さや先輩たちが将来に向けて頑張っている姿を再確認することができた。チェックリストを用いて日常生活を振り返り、自分たちが今頑張ること・目標を考えることができた。

イ　指導案について

指導案（略案）として「授業における観点位置付け・授業改善シート」を使用し、事前にキャリア発達にかかわる目標、支援方法、観点について職員間で検討し、確認することで共有化を図りながら授業実践を行うことができた。

ウ　評価について

各授業終了後に用紙を回覧し、『知識・理解・スキル』『意欲・関心・態度』『目標や授業内容』について結果を記入することで、目標の達成状況などについて評価することができた。また、生徒自身が記入したアンケートやチェックリスト、調べ学習をまとめた表などの資料が、各授業の評価材料として有効であった。

（２）　今後の課題

ア　今後の継続した取組について

今回、「キャリアプランニング・マトリックス（試案）観点解説・改訂版」の「夢や希望（将来設計能力）」にかかわる学習に重点をおき指導目標・指導内容を明確にして授業実践に取り組んだ。「夢や希望」にかかわる学習は、生徒の将来に向けてキャリア発達を促すためのとても重要な学習であることが分かった。今後も内容などについて検討し、授業改善を図りながら継続して取り組んでいく必要がある。

イ　小学部・高等部との連携、教師の意識変容について

「ハッピーライフ」では、高等部の先輩から話を聞く学習を設定し、授業の様子や実習について知ることができた。挨拶、身だしなみ、言葉遣いにかかわる指導は、中学部の取組とも共通している内容であり、今後は中学部卒業後の生徒の姿を想像し、より意識して取り組む必要があることを職員間で共通理解した。また、中学部段階での目標設定や学習内容の配置については、小学部や高等部のキャリア教育にかかわる学習についても理解を深め、一貫したキャリア教育の中で系統的・計画的に検討していくことが必要である。

（３）　２年間の研究をとおして

今回の研究において、１年次は学部の教育活動全体をキャリア教育の範囲と捉え、学習活動の捉え直しと整理・分析をすることができた。

２年次は１年次の課題を受け「夢や希望」に関する学習に重点を置き、指導目標・指導内容を明確にして共通理解を図りながら授業実践を行うことができた。実践を通して、各単元の学習は様々な観点とかかわりがあり、キャリアプランニング・マトリックスの４つの能力は相互に影響し合うものであることを再確認し、一つの学習活動によって複数の能力、態度の伸張が可能であることを理解できた。また、生徒の興味・関心に基づき、実態に応じた役割分担を検討したり、選択場面を多く設定したりと支援のあり方を工夫することで、生徒が主体的に学習活動に取り組む姿や、やり遂げた充実感、達成感を味わっている様子が見られた。

今回の研究では学部のキャリア教育にかかわる学習活動の一部分に焦点を当て、取り組みを行った。今後更にキャリアに関する学習について系統性、計画性をもって進め、生徒一人一人の学習と経験の積み重ねが「自立と社会参加」に結び付いていけるように指導の充実を図っていきたい。

引用・参考文献

[1] 添木博（２００９）神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告

[2] 木村宣孝（２００９）特別支援教育とキャリア．特別支援教育の実践情報．明治図書

高等部

1　主題

「生徒一人一人の卒業後の社会自立を目指した授業づくり」

2　研究主題設定の理由

高等部では、平成19年度から3年間、「地域で豊かに生きるための支援はどうあればよいか」の研究主題で研究を進めてきた。この研究から、生徒が卒業後、地域で豊かに生きるためには、「周囲の支援」「余暇の充実」「生活のイメージをつくること」が大切であることが確かめられた。また、生徒一人一人が卒業後、社会自立に必要な力を付けることの大切さを確認した。

高等部では、社会自立とは、「生徒一人一人が将来の姿をイメージし、自分のもっている力を十分に発揮し、社会の中で生き生きと生活すること」と捉えた。社会自立に必要な力を付けるためには、実態に応じて、指導内容や指導方法の在り方を明らかにし、必要な指導や支援を積み重ねていくことが大切である。

今回の学習指導要領の改訂では、「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」や「一人一人に応じた指導の充実」が改訂事項として挙げられたことに伴い、高等部ではキャリア教育の視点から教育課程の見直しを行った。その結果、「働く力」「生活する力」「余暇の充実」を３つの柱に据えて、教育課程を再編成した。このことにより、あらゆる学習場面で社会自立を目指す授業づくりを進めていくことにした。

研究に当たっては、見直しを経て再編成された教育課程の中で、３つの柱の中心となる授業、「作業学習」「産業社会と人間」「選択教科」に視点を当てる。その中で社会自立を目指した授業の在り方、指導内容の確立、目標や手立ての検討、適切な支援の在り方について明らかにしていきたいと考え、本研究主題を設定した。

3　研究の目的

生徒一人一人の卒業後の社会自立を目指した指導内容と効果的な支援の在り方をキャリア教育の視点から探る。

4　研究の内容と方法

（1）研究内容

【1年次】

・　高等部としての生徒の実態に応じたキャリア教育の指導についての共通理解
・　生徒個々が必要としている力を付けるための授業づくりの充実・発展のさせ方

【2年次】

・　社会自立に必要な力を付けるための授業づくりの在り方、学習内容、指導形態、支援ツール、支援方法の確立

（2）研究方法

・　３つのグループ（働く力、生活する力、余暇）に分かれ、指導内容、支援方法

を工夫し、グループ間で研修を深める。

・　授業を公開し、互いに見合うことで支援の在り方、工夫について実践を高める。

・　授業提案がしやすいように、指導案の様式については、略案形式で提示する。

・　ワークショップ型授業研究会を行い、個々の生徒が必要としている力や支援方法の観点を掲げ、改善策などを検討する。後日、授業改善を図り、検証する。

5　研究計画

月	1年次；学部研究計画	月	2年次；学部研究計画
4	学部研究の方向性	4	15日　2年次の学部研究計画提案 28日　全体研究会①
5	学部研究計画提案・社会自立の捉え・指導計画、内容精選・学習グループ設定　全体研究会①	5	研究実践
6	検証グループ作り	6	
7	略案の提示 本校高等部生徒に付けたい力の確認	7	学部授業提案「余暇G」
8	キャリア教育についての共通理解	8	
9	授業検討（各Gごと）	9	学部授業提案「働く力G」
10	授業提案①「生活する力G」	10	全校授業研提案「生活する力G」
11		11	2年次のまとめ検討
12	全校研；授業提案②「働く力G」	12	全体研究会②　最終報告
1	授業提示③「余暇G」 中間報告「1年次のまとめ」検討	1	研究集録作成
2	全体研究会②	2	

6　研究実践

（1）1年次の実践

見直しを経て再編成された教育課程の中で、「働く力」「生活する力「余暇の充実」の３つの柱の中心となる授業「作業学習」「産業社会と人間」「選択教科」に視点を当て、社会自立を目指した授業の在り方について実践研究した。3つのグループに分かれ、指導内容、支援方法を工夫し、グループ相互の共通理解を図った。

・ 働く力グループ　　授業提案・・・作業学習「農耕班」

・ 生活する力グループ　　授業提案・・・産業社会と人間（高等部1学年）

・ 余暇グループ　　授業提案・・・選択美術

1年次の高等部研究の成果と課題については次の通りである。

ア　働く力グループ

①　生徒の実態に応じたキャリア教育の在り方についての共通理解

（成　果）

・ キャリア教育の押さえを確認できた。働く力という観点でさらに発展させようという意識が高まった。

（課　題）

・ 働く力に関する知識、技能面だけでなく人とかかわる力、将来像を描く力、意思決定する力など、関連付けて指導していかなければならない。

② 生徒個々が必要としている力を付けるための授業づくりの充実・発展のさせ方

（成　果）

・ 個別の指導計画とリンクさせながら生徒個々のニーズに応じた目標、手立てを明らかにし、作業班毎に共通理解を図ることができた。

（課　題）

・ 製品の成果、完成を認め合う場がほしい。また、作業班同志のコラボレーションなども進めていきたい。
・ 地域にある素材、社会資源を活用する場面がほしい。
・ 各作業班ごとに生徒に身に付けてほしい力の意識の統一が図られたので、さらに生活場面でも意識の定着を図っていくことが望まれる。

イ　生活する力グループ

①　生徒の実態に応じたキャリア教育の在り方についての共通理解

（成　果）

・ キャリア教育についての意識が高まった。
・ 授業や普段の支援の中で「将来のこの部分に結び付いている」と思えることが多くなってきた。

（課　題）

・ 授業の中でとなると、活用しきれていない部分がある。

②　生徒個々が必要としている力を付けるための授業づくりの充実･発展のさせ方

（成　果）

・ お互いの授業を見合うことで改善点を明らかにすることができた。グループで話し合い、改めて授業を見直し、共通理解がスムーズであった。
・ 職員間で授業の展開、支援方法を見合うことで自分自身の支援、工夫について幅を広げることができた。

ウ　余暇グループ

①　生徒の実態に応じたキャリア教育の在り方についての共通理解

（成　果）

・ キャリア教育の視点や押さえについて理解することができた。
・ 授業を見るときに、「こういう面が育つ」など意識するようになった。

（課　題）

・ 日常の学習活動とどう結び付いていくか、指導の視点、押さえ方について研修する必要がある。

② 生徒個々が必要としている力を付けるための授業づくりの充実･発展のさせ方

（成　果）

・ 時間を見付けて授業について話題にする場面が増えた。個々に合っているかどうか振り返る機会となり、具体的な手立てなど参考になった。

（課　題）

・ 一斉の授業の中で個々に焦点をあてるのは難しい。
・ 生徒がやりたい内容が異なるので、どう統一した形で進めたらよいか。

＜１年次のまとめ＞

【成　果】

・ キャリア教育の押さえを確認できた。 生徒個々の課題点を明らかにし、手立てを考え、さらに働く力を発展させようと職員の意識が高まった。
・ 生活・進路・実習を中心に据えて取り組むことができた。特にも生活するための技能を高めることができた。
・ 余暇の観点で、知識欲や好奇心をもち、自分なりに時間を楽しむ力が付いた。
・ 社会自立に必要な力である見通しをもって主体的に活動する力や、必要な支援を適切に求め、相談したりする力、自主的に選択する力を高めることができた。

【課　題】

・ 各作業班毎に生徒に付けたい力の意識の統一が図られた。今後は生活場面や寄宿舎との支援方法の絡みで職員間の意識の定着を図っていかなければならない。
・ 一斉指導とグループ指導を時間設定し、さらに個に応じた支援を心がける。進路実現、生活する力を付けていくための指導内容、指導の展開について深める。
・ 楽しみや夢をイメージし、表現する力を付けたり、地域資源を適切に活用したりして、余暇の時間の充実の視点で考えていく。

（２）２年次の研究実践

２年次は、高等部におけるキャリア教育の視点を踏まえながら、以下の取り組みを通して、卒業後、社会自立に必要な力を付けるための授業づくり、支援の在り方について明らかにした。実践の柱である「働く力」、「生活する力」、「余暇」について、それぞれのグループから社会自立を目指した指導内容と効果的な支援の在り方について、キャリア教育の視点から授業提案し、ワークショップ形式で成果、課題、改善点を話し合った。後日、授業改善を図り、生徒個々が必要としている力を身に付けることのできる目標、内容、支援であったかを検証した。

ア　働く力グループ

将来の職業生活、家庭生活及び社会生活に必要な基礎的な知識、技能、態度を実践的な学習を通して身に付けることをねらいとして授業を行っている作業学習を「働く力」グループと位置づけた。そこで、生徒の実態に応じた支援の在り方、生徒個々が必要としている力の付け方、自立的、主体的に取り組む力を付けるための授業づくりの充実、

発展のさせ方について検証を進めた。

a　ねらい

①　社会生活に必要な知識・技能・態度を身に付ける。

②　生産の向上を図ることにより、よりよい作業を行おうとする意欲をもつとともに、参加する喜び、完成の成就感を味わうことができる。

③　すべての生徒が今もっている力を最大限に生かし、主体的に取り組むことができる。

b　研究授業と研究協議から

①　授業提案［陶芸班　（男子６名、女子４名）、指導者４名］

＜指導におけるキャリア教育の主たる観点＞

・　職業及び働くことの意義と社会生活において果たすべき役割の実行
・　必要な支援を適切に求めたり、相談したりできる意思表現
・　役割の理解と働くことの意義
・　場に応じた言動、状況に応じた言葉遣いや振る舞い

②　研究協議から

・　自分の作業内容を理解している生徒が多い。売れるためにはどうしたら良いか考えながら作業に取り組むことができていた。
・　道具の操作、活用の仕方が徹底されていた。一人一人の教具が工夫され、意欲的に作業に取り組めることができていた。場の設定が分かりやすい。作業に集中できている生徒が多い。
・　個人の目標数、製品の在庫数が分かりにくい。それぞれのパーツの表を提示し、チェックできるよう視覚的に捉えることができるようにしたらどうか。サンプルを提示し、報告や見通しがもてる手立て、ツールを準備した方が良いのではないか。作業台の高さは、適切であったか。

③　授業改善後の生徒の変化

・　一日の個人目標数、視覚的教材を掲げたことにより、見通しがもちやすく目標達成に向けて意欲的に作業に取り組むことができるようになった。
・　自分の仕事に責任をもち、役割を果たそうとする姿が見られるようになった。
・　製品の出来具合を意識するとともに、製品を仲間と協力して作り上げる喜びを得ることができるようになってきた。

C　成果と課題

・社会自立に必要な力を付けるための授業づくりの在り方、学習内容、指導形態、支援ツール、支援方法の確立について

（成　果）

・　キャリア教育の観点を絞ることで、個に応じた教材を研究することができた。作業内容の充実、生徒の意欲の高め方などを確認することができた。

・　作業学習を毎日継続して取り組めたことで、生徒が作業に見通しをもちやすい。

・　作業班同士のコラボレーションを行った。製品の成果を認め合う場ができ、働く喜びを分かち合うことができた。

（課　題）

・　知識、技能のみにかかわらず、キャリア発達に合わせて支援すること、卒業後を見通した支援の在り方、社会自立に向けた指導について工夫していくことが大切である。（資料；Ｐ１３ページ　）

・　地域にある素材、社会資源を活用する場の開拓が課題である。将来に繋がる視点で個に応じた作業を提供していくことが求められる。

d　働く力グループのまとめ

・　作業班毎に生徒に身に付けたい力の意識の統一を図った。生徒個々の課題点を明らかにし、手立てを考え、働く力を発展させようと職員間（学校・寄宿舎）の意識が高まった。今後は生活場面のどこで意識の定着を図るか、生徒自身の気付きと学校、寄宿舎、家庭、関係機関が情報を共有化していくことが求められる。

・　震災の復興に向けて、製品が県内外に向けて販売されるケースもあった。地域に出て、社会での役割を果たせるような活動をしていくことを視野に入れていきたい。

・　卒業後を見通した視点や、個に応じた作業内容の提示をさらに詰めていく。

◎　社会自立に必要な力である、自分の役割を認識し、見通しをもって主体的に活動する力が高まった。他者と協力して作業を進めようとする力に変化が見られた。

◎　自分の仕事内容が分かり、最後までやり遂げる力が付いた。働くための知識、技能を高めようとする意欲をもつようになった。今後は、自分にふさわしい社会参加の在り方を選択していけるような学習場面を設定していくことが求められる。

イ　生活する力グループ

自己の将来の生き方を探求する、将来の職業生活を営む上で必要な力を培う、自己の生き方、在り方について認識し、豊かな社会を築くための意欲や態度を育成することにより、生活する力を付けるという視点から、1～２学年は「産業社会と人間」、３学年は、「国語・数学」を「生活する力」グループと位置付けた。そこで、生徒の実態に応じたキャリア教育の視点に立った指導についての共通理解や生徒個々が必要としている力を付けるための授業づくりの充実・発展のさせ方について検証を進めた。

a　ねらい

【１学年】

①　将来の仕事や生活について考える。

②　学習や実際に経験する中で、将来に必要なスキルを身に付ける。

【２学年】

①　将来の仕事や生活について考える。

②　学習や実際に経験する中で、将来に必要なスキルを身に付ける。

【３学年】

①　日常生活に必要な国語についての理解を深め、活用することができる。

②　コミュニケーション能力、表現力を高めることができる。

③　日常生活に必要な数量や図形、計算などの理解を深め、活用することができる。

b　研究授業と研究協議から

①　授業提案　２年「産業社会と人間」（男子７名、女子２名）　指導者２名

＜キャリア教育の主たる観点＞

・　職業との関係における自己理解、他者の考えや個性の尊重

・　必要な支援を求めたり、相談したりできる意思表現

・　場に応じた言動、状況に応じた言葉遣いや振る舞い

・　産業現場等における実習などにおいて行った活動の自己評価

②　研究協議から

・　3段階評価ではなく、○×評価の方が有効ではないか。チェックシートの項目が多かったことから、精選する必要がある。

・　適切な自己評価を行うため、生徒同士での話し合いや、毎日の実習日誌の○×を参考にできると良いのではないか。付箋紙の数が多かった。

・　支援の在り方において期限を設け、課題改善できるようにしたことは良い。

・　実習での成果、自信があるところも認め、生徒間で評価しあえると良い。発表、確認し合うことで意欲を高めることができるのではないか。

③　授業改善後の生徒の変化

・　生徒同士、話し合えるように場の設定を工夫した。困った時に自ら支援を求めたり、相談したりして解決しようとする姿が見られるようになってきた。

・　自分の良いところ、伸びたところも発表し、確認し合うことで、学習参加意欲が高まった。

・　課題解決に向けて、情報を収集しながら考え、自分の意見と他者の意見の違いに気付くことができた。

c　成果と課題

・社会自立に必要な力を付けるための授業づくりの在り方、学習内容、指導形態、支援ツール、支援方法の確立について

（成　果）

・　チェックリスト表の見直しを行い、実習先評価表と項目をリンクさせた。（Ｐ11）
・　一斉指導とグループ指導の時間を設定し、個に応じた支援を心がけることができた。
・　進路実現、生活する力を付けていくための指導内容、指導展開について話し合い、深めることができた。指導について検討を重ねたことは良い。

（課　題）

・　学部全体でチェックリスト表を活用できなかった。来年度から学部全体で活用していけるようにチェックリスト表の確立を行う必要がある。
・　個に応じた支援ツール、教材教具の工夫を充実させていくことで、社会自立する力が高まると考えられる。
・　来年度、教育課程が統一される。「産業社会と人間」の指導内容を吟味し、段階的に取り扱う内容、指導内容の時期を目安として学部として確立していく。

d　生活する力グループのまとめ

・ グループ研究が深まった。その他の領域教科を合わせた指導の中で生かしているか考えていく必要がある。生活の中でどのように取り上げていくか重要である。
・ 適切なコミュニケーションを取ることができるように場面を設定し、支援の充実を図った。言葉遣いや人と話す時の声の大きさや目線・姿勢、身だしなみなどの改善が少しずつ見られるようになってきた。
・ 生徒自身が考えて行動に移す力や態度、気持ちに変化が見られるようになった。
・ より良い生活になるように適切な選択ができるような課題提示ができた。
◎ 働く意識の高まりから、冷静に自己を見つめる自己理解につながった。
◎ 社会自立に必要な力である、必要な支援を適切に求め、相談する意思表現力が高まった。

ウ　余暇グループ

将来の趣味や余暇活動につなげることをねらいとした選択教科（体育、美術、家庭、音楽）を「余暇」グループと位置付けた。その中で生徒の実態に応じて余暇を活用する力を育成するための授業づくりの充実・発展のさせ方ついて検証を進めた。

a　ねらい

【選択体育】

① 様々なスポーツの経験を通して、運動の楽しさや喜びを味わう。
② 健康・安全に留意する。

【選択音楽】

① 表現及び鑑賞の能力を養い、音楽活動への意欲を高める。
② 家庭生活における余暇の過ごし方を知る。

【選択家庭】

① 家庭生活に必要な基礎的な知識や技能を身に付ける。
② 家庭生活における余暇の過ごし方を知る。
【選択美術】
① 造形活動を楽しむ。
② 日用品の制作を通して、生活を楽しむ気持ちをもつ。
③ 作品を飾ったり、発表したりする技能を身に付け、活動に意欲をもつともに、美術作品について関心をもつ。

b 研究授業と研究協議から

① 授業提案　選択美術　11 名（男子 10 名、女子 1 名）　指導者 3 名

＜キャリア教育の主たる観点＞

- 自己の個性や興味・関心に基づいた良い自己選択
- 職業の意義の実感と将来設計に基づいた余暇の活用
- 職業生活・社会生活に必要な事柄の情報収集と活用
- 集団における役割の理解と協力、集団の一員としての役割の遂行

② 研究協議から

- 生徒一人一人が興味をもって取り組み、自己選択、自己決定の場面が準備されていた。
- やってみたいと思えるような教材、画材、技法が準備されていた。生徒の意欲が高まる内容であった。素材の数が豊富で選択しやすかったことは、意思決定の力に繋がっていた。スタンド式のグループ・場を表示するものが良い。
- 自己選択が難しく迷う生徒について、教師側の支援の対応策が必要である。
- 将来的なことを考え、自分で調達する方法も知っておく学習が必要である。買って準備するだけでなく、校内、家にあるものを集めて余暇を楽しむなどの経験も欲しい。

③ 授業改善後の生徒の変化

- 体験場所を変えてみたところ、自分のやりたいことを自己選択し、関心をもちながら活動に参加することができた。
- 必要な教材、素材を考えたり、校内にある画材を探したりする時間も設けた。情報を得て行動に移す力、余暇を楽しむ方法に広がりが出てきた。

c 成果と課題

・社会自立に必要な力を付けるための授業づくりの在り方、学習内容、指導形態、支援ツール、支援方法の確立について

（成　果）

- キャリア教育の視点を踏まえて授業づくりについて考えるようになった。

・　家庭生活においてもできること、一人でできるものを教材として提示することができた。
・ 余暇の指導を考える上で、ポイントの確認ができた。授業を通して、自分の授業の反省のポイントが広がった。
・ 楽しみや夢をイメージし、表現する力を付けるための指導内容を提示することがができた。

（課　題）

・　授業のどの部分にキャリア教育の観点を入れるか、指導や手立てを考えていくことが重要である。
・　今後も継続した研修、意識を積み重ねることが大事である。

d　余暇グループのまとめ

・　自己決定、自己判断して行動する力について意識して支援することができた。その結果、生徒が主体的に活動に参加できるようになった。
・　知識欲や好奇心をもち、自分なりに時間を楽しみ、活動に移す力が育った。
・　余暇の充実に向けて、地域資源を適切に活用することも視野に入れていかなければならない。
・　共通のテーマの中で時間を共有し、お互いを認め合う姿が見られた。
◎　友達と会話やゲーム、趣味を楽しむ場面が見られるようになった。
◎　日常生活の場面での挨拶、行動などにおいて意欲的、積極的な面が見られるようになってきた。また、体力の向上、集中力が増してきている。
◎　自分の好きな活動を見付け、自主的に選択して余暇を楽しむ力を高めることができた。

７　まとめ

高等部では卒業後の社会自立を目指し、「生徒一人一人が将来の姿をイメージして、自分のもっている力を十分に発揮し、主体的に地域社会の中で生き生きと生活する」ための授業づくりの在り方を、３グループの授業の取り組みを中心に探ってきた。教育課程編成において「働く力」「生活する力」「余暇の充実」を３つの柱に据え、経験、挑戦、振り返りの授業を積み重ねた結果､社会自立に向けた授業づくりを充実させることができた。実践で生徒が培った自己理解、自己表現力、自己選択力、役割を認識する力は、今後のキャリア発達、キャリア開発に繋がると言える。

キャリア教育とは、「将来生活に必要な力を育む教育」「生徒の主体性を育む教育」ではないだろうか。今後もキャリア教育の観点から生徒の実態を踏まえ、生徒に意欲をもたせる支援を行っていく。また、社会自立に必要な力を付けるための授業づくりの在り方、学習内容、指導形態、支援方法の確立について探っていく。そして、それらの中で一人一人の社会自立と夢の実現に向けてサポートしていきたい。

また、本研究の研究内容の一つでもある発達段階に合わせて作成したキャリア発達段階表（表１～３参照）を、今後のキャリア発達を促す指導、支援の段階的な指針として、共通理解しながら社会自立に向けた授業づくりに役立てていきたいと考える。

チェックシート（後期）＜集計用＞　氏名

		項　目	実習前		実習後
生活面	1	はっきりした声であいさつや返事ができていますか。		→	
	2	必要なときに自分の気持ちや考えを伝えることができていますか。		→	
	3	先生や先輩と話すときに丁寧な言葉遣いができていますか。		→	
	4	相手に嫌な思いをさせる言葉遣いをしていませんか。		→	
	5	自分の持ち物をきちんと整理整頓していますか。		→	
	6	身だしなみ（服装・髪型）や清潔に気を付けて生活していますか。		→	
	7	５分前行動を心掛けていますか。		→	
	8	好き嫌いをせず、マナーを守って食事をしていますか。		→	
作業面	9	安全に気を付けて作業に取り組んでいますか。		→	
	10	素直な態度で指示や注意を聞いていますか。		→	
	11	いつも張り切って仕事をしていますか。		→	
	12	休まずに最後まで続けることができていますか。		→	
	13	正確な作業ができていますか。		→	
	14	おしゃべりやよそ見をしないで集中して作業に取り組んでいますか。		→	
	15	言われなくても準備や後片付けをしていますか。		→	
	16	スピードを意識して作業していますか。		→	
	17	忘れずに報告ができていますか。		→	
	18	分からないときや困ったときに、質問や相談ができていますか。		→	
	19	失敗したときにすぐに謝罪の言葉（すみませんでした）が言えていますか。		→	

チェックシート（後期実習前）　＜自己評価用＞　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

		項目	A	B	C
生活面	1	はっきりした声であいさつや返事ができていますか。	いつも自分からはきはきとしている。	あまりはっきりしなかったり、声をかけられてからすることが多い。	何度も声をかけられてできる。はっきりしない。
	2	必要な時に自分の気持ちや考えを伝えることができていますか。	必要なことをすぐに伝えることができる。	時間がかかったり、声をかけられて伝えることができる。	声をかけられても伝えることが難しい。
	3	先生や先輩と話す時に丁寧な言葉遣いができていますか。	いつも丁寧な言葉遣いができている。	言葉遣いを注意されることがある。	言葉遣いを毎日のように注意される。
	4	相手に嫌な思いをさせる言葉遣いをしていませんか。	嫌な思いをさせることはない。	嫌な思いをさせてしまうことがある。	嫌な思いをさせることが多い。
	5	自分の持ち物をきちんと整理整頓していますか。	いつも自分できれいに整理整頓している。	自分で整理整頓するが、できていないことがある。	言われないと整理整頓できない。
	6	身だしなみ（服装・髪型）や清潔に気を付けて生活していますか。	いつも自分で気を付けることができる。	乱れていて注意されることがある。	いつも注意される。
	7	５分前行動を心掛けていますか。	常に心掛けて行動している。	時間には間に合うが、ギリギリになることが多い。	時間に遅れることが多い。
	8	好き嫌いをせず、マナーを守って食事をしていますか。	いつもマナーを守っている。	時々マナーを守れずに注意されることがある。	マナーを守れず、注意されることが多い。

表１　気仙光陵支援学校高等部　働く力　キャリア教育；発達段階表

領域	能力	1段階 働くための知識、技能を知る	2段階 働くための知識、技能を高める	3段階 働くための知識技能を得る
人間関係形成能力	自他の理解能力 コミュニケーション能力	自分のやる仕事が分かる 協力して作業する 場面に応じた挨拶、返事、報告、質問の仕方 言葉遣いに気を付ける	集団の中で自分らしさを発揮することができる 作業を通し、役割と責任を果たそうとする TPOに合わせたコミュニケーションのとりかた　支援の求め方、相談の仕方を知る	自分の力が発揮できるとともに、様々な場面において相手のことも考えて作業できる 作業を通し、他者と協力し、役割と責任を果たそうとする 異年齢、性別、上司など、他者と場に応じた適切なかかわり方ができる
		身辺処理の確立【服装、身だしなみ、清掃】　日誌の記入　集団としての役割 リーダーとチーム　言葉遣い　お客さんとのかかわり など		
情報活用能力	情報収集・探索能力・職業理解能力	作業を体験し、働く意義や働く楽しさを感じる 自分に必要な情報を集める 仕事上のルールとマナーを知る	作業、実習を通し、様々な職業や生き方があることを知る 職業に関する情報を得て活用することができる 作業や実習を通して、働く上で必要なルールとマナーを知る	職業観、勤労観を理解し、職業に対する理解、認識を深める 生き方や進路に関する情報を収集し、活用する 社会の法制度、福祉サービスの活用方法を知る
		作業内容の理解　道具の使い方　名称・工程理解　パソコンの活用　金銭処理と管理　実習 時間の意識　流通　生産地の理解　商品の質　製品の良、不良の判断　安全　職場見学		
将来設計能力	役割把握・認知能力・計画実行能力	自分なりに将来の夢、希望を膨らませる 働く上で、様々な役割があることを知る	自分にふさわしい仕事や職業に興味・関心を高める 社会生活の様々な役割を理解し、大切さを知る	将来の進路達成に向けて努力する 様々な役割を自覚し、責任をもって役割を果たす
		健康管理　体力の維持　カレンダーワーク　将来設計　係活動　など		
意思決定能力	選択能力 課題解決能力	自分がやってみたい、または自分に必要のある作業に進んで取り組んでみる 自分の仕事に責任をもち、積極的に取り組む	作業や実習を通して、将来自分のやってみたい仕事を選ぶ 自己の課題に積極的に取り組み、主体的に解決しようとする	卒業後の進路先を選ぶ よりよい進路選択、夢の実現に向けて自ら課題を克服しようと努力する
		目標設定　反省　評価　道具の選択　材料決め　自己判断　など		

表2 気仙光陵支援学校高等部　生活する力　キャリア教育;発達段階表

領域	能力	1年	2年	3年
		将来生活に必要なスキルを獲得する		
人間関係形成能力	自他の理解能力 コミュニケーション能力	自分を知る(長所・短所) 友達の良さを見付ける	自分や友達の長所に気づく 集団の中で自分らしさを表現できる	自分のよさ、個性が分かる 相手の立場に立ち物事を考える
		友達と協力して学習活動に取り組む		実習等を通し、他者と協力し、役割と責任を果たそうとする
		実習や体験活動を通し、役割と責任を果たそうとする		
		困った時に自ら支援を求めたり、相談できるようになる		幅広い年齢の人と適切にコミュニケーションを行う
		季節、健康、行き先、身だしなみに合わせたマナーを知る	TPOに応じ、相手の立場に立って、行動しようとする	他者に気を配りながら適切に人間関係を築く
		挨拶　返事　報告　手紙　履歴書　身だしなみ　マナー　役割の理解　など		
情報活用能力	情報収集・捜索能力・職業理解能力	学校と働く場の違いに気付く	実習を通し色々な職業や生き方があることを様々な角度から情報を集めて考える	
		交通機関の経路と利用法 、様々な制度、切符、時刻表の見方、電話、広報、新聞 、情報収集の仕方、サービスを知る		
		図書、インターネットの利用の仕方を知る	働くことの意義や働く上での必要なことを情報収集、整理し活用する	
		働くことの意義や働く上での必要なルール、マナー、スキルを身に付ける		
		職場体験　療育手帳の意味と活用　金銭の管理　新聞　身近な英語　など		
将来設計能力	役割把握・認知能力・計画実行能力	将来に向けて自分なりに夢や希望をもつ	将来の夢をもつとともに、自分にふさわしい仕事について関心を高める	希望する進路に基づいて目標を立てて努力する
		仕事や職業へ興味関心を高める	夢を叶える為の方法を探る	社会生活には、様々な役割があることを知り、その役割に最後まで責任をもって行う
		社会生活に様々な役割があることを知る	社会生活には、様々な役割があることの大切さを知る	
		衣食住　買い物　調理　余暇活動　スケジュールの立て方　ライフステージ　など		
意思決定能力	選択能力 課題解決能力	自分がやりたいこと、必要であると思うことに進んで取り組む	卒業後、進路先を自分で選択することができる	
			自分でやりたいことを選ぶ。できる、できないを知る	
		自分の仕事に対して責任をもち、積極的に取り組む	自分の仕事に責任をもち、最後までやり遂げることができる	夢の実現に向けて自己の課題を解決しようと努力する
		教師から助言を受けながら課題の解決法を知る	自分の課題に気付き、解決法を考えることができる	課題について仲間と話し合い、解決方法について助言することができる
		目標設定　ふりかえり　感想　進路選択　校外学習　宿泊・旅行旅行　など		

表3　気仙光陵支援学校高等部　余暇（選択教科）　キャリア教育；発達段階表

領域	能力	1段階	2段階	3段階
		レパートリーの開拓	環境把握・ルール理解	社会的対人関係
人間関係形成能力	自他の理解能力　コミュニケーション能力	友達と協力して、活動に意欲的に取り組む 自分と相手の違いを知る 相手の立場に立って考え行動しようとする いつでも、どこでも、だれとでもいろいろな活動が行える 集団行動　姿勢　集合と行進　集団ゲーム　体作り 絵手紙　・カード作り　相談相手　など		集団の中で、自分の役割と責任を理解し行動する 異年齢の人や異性等、他者と場に応じた適切なコミュニケーションを行うことができる
情報活用能力	情報収集・捜索能力・職業理解能力	興味・関心をもつ パソコン活用　図書館　レンタルショップ利用　金銭管理　カラオケ利用 公共施設利用　ルールとマナー　電話利用　法制度の理解　など	いろいろな物事や方法があることを知る	社会のルールやマナーを理解する
将来設計能力	役割把握・認知能力・計画実行能力	決められた事をきちんと行う ニュースポーツ　地域ボランティア　健康管理　買い物　将来設計 描く・作る・鑑賞・体験　趣味サークルへの参加　調理・被服・住まい　など	自分の役割とルールを理解する	
意思決定能力	選択能力　課題解決能力	自分のやりたいことを選択し、進んで行う 自分のことは自分で行おうとする 材料を買う　体験活動　催し物への参加　など	最後までやり通そうとする	

◎選択教科の押さえ

・生徒が自分自身を取り戻し落ち着いた心の安定を図り、また活発に学習や日常生活を送ることができるように活力を養う。

・日常生活の中における達成感、成長、刺激から「楽しさ」を生み出すための力を養う。

◎教育課程における対象教科

・実技系教科を中心と考え、体育（リクリエーション、簡易ゲーム等）、音楽（楽器演奏、音楽鑑賞）、美術（創作、絵画）、家庭（調理、手芸）の4教科を設定する。

寄宿舎

１　主題

「児童生徒が生活力を獲得するための支援の工夫と実践」

～インシデント・プロセス法を活用した事例研究を通して～

２　研究主題設定の理由

寄宿舎は生活の場であることから、子どもたちの生活に即して、社会生活を主体的に生きる力を育むことのできる環境にある。子どもたちの豊かな生活の実現を目指すにあたり、子どもの実態の情報を共有し、お互いにアイディアを出し合って組織的な支援ができればと考えた。そこで「支援について語り合う」ことに着目し、インシデント・プロセス法を用いた事例研究に取り組むこととした。

１年次の研究では、演習による実体験からインシデント・プロセス法の手法について学んだ。今年度は、個別の支援計画の作成や事例研究会において、実際にインシデント・プロセス法を取り入れ、日常的に活用していくことを目指した。

３　研究の目的

（１）　児童生徒への理解を深めるとともに、効果的な支援方法の在り方を探る。

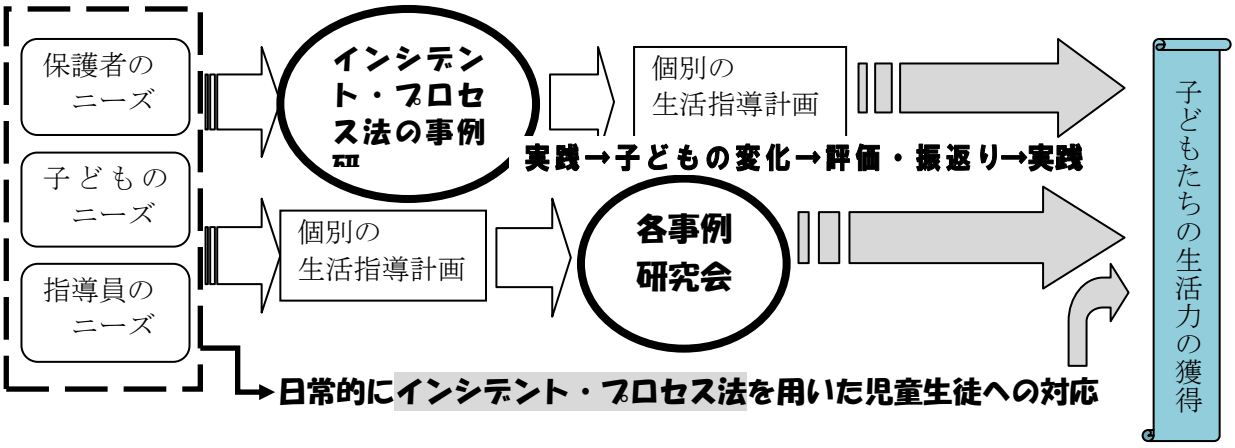
（２）　職員間の連携を深め、チームで支援する体制をつくる。

４　研究の内容と方法

（１）　インシデント・プロセス法を用いた個別の生活指導計画の作成

（２）　インシデント・プロセス法による事例研究の実践

（３）　個別の生活指導計画に基づく一人一事例研究の取り組み



5　研究計画

月	研究内容（１年次）	月	研究内容（２年次）
4		4	寄宿舎２年次研究計画の検討 全体研究会①
5	寄宿舎研究計画の検討　全体研究会① 個別の支援計画検討会	5	個別の生活指導計画検討会 事例研究会（インシデント・プロセス法）
6	研究実践	6	研究実践
7		7	
8	校内研修（インシデント・プロセス法）	8	事例研究会（インシデント・プロセス法）
9		9	事例研究会
10	個別の支援計画検討会	10	個別の生活指導計画検討会
11	事例研究会	11	寄宿舎研究まとめ
12	事例研究会（インシデント・プロセス法）	12	全体研究会②
1	１年次のまとめ	1	研究集録製作
2	個別の支援計画検討会　全体研究会②	2	
3		3	研究集録（CD と HP）

※１年次は『個別の支援計画』と表記し、２年次からは『個別の生活指導計画』と表記する。

6　研究実践

（１）１年次の成果

従来の事例研究とインシデント・プロセス法を用いた事例研究を比較することで、以下の知見を得た。

○個別の支援計画に基づく一人一事例研究会

・資料作成に時間と労力がかかるが、文章化することで自身の取り組みを振り返ることができ、職員間の共通理解を図る上では効果的である。

・事例提示に時間がかかるため協議時間が不足しやすく、話し合いの場が共通理解を図るに留まり、具体的な支援の方策を見出すまでに至りにくい。

・指導上の話題が批判につながることを恐れ意見が出にくい。

○インシデント・プロセス法を用いた事例研究会

・資料作成に時間をとられることがない。

・時間設定や進行上のルールがあり、焦点を絞った話し合いができる。

・否定的な内容ではなく、具体的な支援方法やアドバイスを出し合うことができる。

・参加者全員が主体的に話し合いに参加することができる。

・安心して、誰もが発言できる雰囲気をつくることができる。

（２）１年次の課題

ア　インシデント・プロセス法の日常的な活用の方法。

イ　インシデント・プロセス法を活用した事例についての、検証の手立て。

ウ　インシデント・プロセス法を用いた事例研究会と、個別の支援計画をもとにした一人一事例研究会との使い分けや関連性の明確化。

（３）　２年次の実践

ア　インシデント・プロセス法を用いた個別の生活支援計画の作成

事例１　　落ち着いて過ごすことが難しい（中１　女子）

インシデント

自由時間に静養室や舎室で過ごすことができず、廊下をうろうろとしている姿が目立つ。好きなことを見付けて過ごすことができずにいる。廊下をうろうろしながら男子生徒にしつこく話しかけたり、スキンシップを取りたがる様子も見られる。ＣＤを聞いたり、ＤＶＤやＴＶを見るのも長続きしないため、自由時間に落ち着いて過ごせるような支援のアイディアをいただきたい。

課題

（１）友達とのかかわり方について
　　友達（舎生）と、どうしたらうまくかかわることができるか。
（２）家族とのかかわり方について
　　家族間で、どのようにしたらうまくかかわることができるか。
※寄宿舎生活にかかわる（１）について話し合う。

支援のアイディア

◆言葉遣いや態度について、今まで何度も注意されてきているのではないか？
・褒めることで成功体験を積む。
例）当番活動や本人がチャレンジしたいことなどに取り組み、できたら褒める。

◆個別指導ではなく全体指導を行い、できたときには褒める。

◆人とのかかわりを十分に経験していないのではないか？
・まずは、大人（職員）が関わる対象となる。
・ふれあう、接する時間を取る。
・かかわる時間を提示することで、本人が安心して関われるよう配慮する。
・子ども同士の関わりに大人が介入し、繋いでいく。
→心地よいかかわり方ができることで落ち着くのではないか？

◆なぜスキンシップを求めるのかを見極め、把握し、対応することが必要。
・新しい環境での生活が不安なのか？
・経験不足によって関わりを求めているのか？

個別の生活指導計画

【年間目標】
他者との適切なかかわり方ができる。

【前期目標】
パーソナルスペースを知る。

【支援の方法・手立て】
①パーソナルスペースについて全体指導を行う。
②家庭環境により満たされないという思いがあるため、職員が１対１でかかわる時間をもつ。
③友達と心地よいかかわり方ができるよう支援する。
④言葉遣いが不適切なときは振り返りを行い、丁寧な言葉遣いができるようにする。

【実践内容】

支援	具体的内容	本生徒の様子
①	【パーソナルスペースについての全体指導】 日時　　７月７日（木）　下校後 場所　　２号室 対象　　中学部女子８名 内容　　・パーソナルスペースについて ・プライベートゾーンについて ・身体を清潔にしよう	・学校の全体指導で一度学んでいるため、クイズ形式による問いかけにも自分の知っていることを積極的に発言する。 ・他者との適切な距離を保つことは難しいが、パーソナルスペースという言葉の意味は理解できている。 ・他の生徒が職員や友達と距離が近いことに対して指摘する場面は見られるが、自分の行動を客観的に見ることは難しい。
②	・他の生徒にも配慮し、特別に時間を設けるのではなく、整理整頓の時間や布団を敷きの時間を活用し、１対１でかかわる時間をもつ。	・最初は返事も曖昧で、話している最中でも部屋を飛び出して廊下をうろつくことがあった。繰り返していくうちに、落ち着いて１対１でかかわる時間を過ごせるようになる。 ・徐々に笑顔が見られるようになり、本生徒なりに素直に甘える様子も見られるようになった。
③	・職員も遊びの輪に加わり、みんなで楽しく遊べる環境をつくる。 ・友だちの気持ちや考えを職員が分かりやすく伝え、誤解によるトラブルを避ける。	・トランプ遊びは勝敗にこだわるため、負けそうになるとカードを投げ出してしまう。 ・テニスでは職員にだけボールを回す行動が続きがちであった。職員が輪から外れて見守ることで、みんなに順番に回すことができた。 ・しつこくかかわりを求めたり、自己中心的な行動によるトラブルが多いが、職員が加わることで遊びを楽しむことができる。
④	【定期的に約束を確認】 『やくそく』 ・パーソナルスペースを守る ・友だちとなかよくする ・乱暴な言葉は使わない ・他人に注意や命令をしない ・返事をする	・声がけによって不適切な言葉づかいに気が付くことができるが、気分によって素直に受け入れられないことがある。 ・入舎した頃はまったく返事をすることができなかった。返事ができても「うん」と言うだけで、なかなか「はい」とは言えない。「はい」と返事をすることができた生徒が褒められている姿を見て、返事を促した際に「はい」と言えることが増えてきた。職員に褒められると、照れながらも嬉しそうな表情。現在は「はい」と返事をすることができる。
⑤	【その他】 ・１階北の棟でもテレビが視聴できる環境を整える	・テレビを見に行くことを口実にふらふらとする様子が目立っていたが、１階北にテレビを設置してからは階段付近をうろつくことはなくなった。 ・廊下を通る男子生徒が気になって部屋を出てくることもあるが、声がけで部屋に戻って過ごすことができる。

【考察】

４月は、教育相談や入舎説明会とは異なる本生徒の様子に戸惑い、落ち着いた寄宿舎生活を送るためにどのような支援をしたらよいのかとても悩んだ。インシデント・プロセス法により、課題と思われることを職員間で共通理解し、それに対する支援や手立てのアイディアをいただくことで、具体的な支援・指導に不安なく取り組むことができた。

本生徒の一番の変化は、「はい」と返事ができるようになったこと、人の話を聞くことができるようになったことである。周りのことが気になって落ち着いた生活ができずにいたが、その分周りの生徒や職員の行動をよく観察しているということもできる。他の生徒の見本となる行動（はっきりとした返事や話を聞く姿勢）を褒めることが、本生徒の『気付き』につながったと考えられる。職員間では、たとえ小さな声でも返事ができたときには褒めることを心がけた。褒められることで生まれる嬉しいという気持ちが、次への意欲となり、次第に返事ができるようになっていく姿を見て、成功体験を積むこと・褒めることがとても効果のある指導法であることを実感した。

本生徒の素直さを引き出すことにより、できることや得意なことをたくさん見つけ出したいと思う。寄宿舎での集団生活が経験の拡大となり、本人の成長や自己実現に役立つものになるよう、今後も支援していきたい。

事例２　　上手く人とのかかわりがもてない生徒（高１　男子）

インシデント

「うんち」「おしっこ」と不適切な言葉を言うことで、人の気持ちを引こうとしたり、人とかかわろうとする本生徒への指導について具体的な支援のアイディアをいただきたい。

課題

（１）間違ったかかわり方を覚えたこと。
（２）周囲が間違った反応をすること（笑う、注意する等）。
（３）友達とのかかわりが少ないこと。

支援のアイディア

◆いけないことだということを分かるように伝える。
別のかかわり方を教える。

◆①絵カードで示す。
言ってはいけないときだけでなく、いいときも示してあげる。
例）ひとりのときは○
　　大勢のときは×
②言ってしまったとき
→毅然とした対応（言葉・表情）
③言い続けたら
→場所を変える

◆楽しい行事や係活動をいかす。
始めは職員が間に入って、子ども同士のかかわりが確認できたらだんだん引いていく。

◎生徒同士のかかわりを増やす。

個別の生活指導計画

【年間目標】
当番活動ができる。
【前期目標】
点呼当番でみんなの名前を呼ぶことができる。
【支援の方法・手立て】
・登校前の朝の会で、みんなの点呼をとる係をする。
・名前を覚えていない生徒は自分の名前を名乗り、顔と名前が一致するように配慮する。
・名前を呼ばれた生徒は大きな声で返事をし、名前を覚えて呼ぶことができたら職員が褒める。

【実践内容】

インシデント・プロセス法での事例研究から、不適切な発語の原因として人とのかかわりに課題があることが明確になった。そこで、支援のアイディアとして出された係活動を通して子ども同士のかかわりを増やすことを目指し、個別の生活指導計画に取り入れた。

朝の棟会は基本的に棟長が司会をし進めるものであるが、一人ひとりの名前を呼ぶ呼名係を本生徒の役割とした。

今年度入舎した生徒に関しては、はじめは名前もわからず職員に名前を聞いて進行するところが見られたが、次第に周りの生徒が助け舟を出すようになり本人もそれを頼りに進行している。現在は、棟の生徒ほぼ全員の名前を呼ぶことができている。

【記録】

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月
K・R （小 4）	△	△	○	○	○	○	○	○
K・K （小 4）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
K・M （小 6）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
K・T （小 6）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
O・J （中 1）		△	△	○	○	○	○	○
M・T （中 2）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
A・S （中 2）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
M・T （中 3）		△	○	○	○	◎		
U・K （高 1）	△	△	△	△	○	○	○	○
K・A （高 1）	△	△	△	△	△	△	○	○
S・T （高 1）	△	△	△	△	△	○	○	◎
F・S （高 2）	△	○	○	○	◎	◎	◎	◎
S・F （高 2）	△	△	○	○	○	○	○	○
N・Y （高 2）	△	△	△	△	△	△	○	○
T・T （高 2）								
S・T （高 3）	△	△	△	△	△	○	○	○
T・H （高 3）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

△名前を覚えていない

○ヒントをもらい名前を呼ぶことができる

◎名前を呼ぶことができる

【考察】

友達とのコミュニケーションのきっかけになるように、「呼名係」にすることで友達の名前を覚えるための取り組みをしたが、インシデントにあげたような不適切な発言がなくなることにはつながらなかった。ただ、名前を覚えてもらった友達は嬉しいらしく、本生徒への興味につながった。今後は、必然的な係活動の場だけでなく、日常の必要な場で名前を呼んで相手に気持ちを伝える取り組みが必要となってくる。

事例３　　欲しい物を我慢することが難しい（中１　男子）

インシデント

・「クワガタが欲しい」との強いこだわりから気持ちが不安定になり、日常生活に支障を来している。
・夜に職員とＹ・Ｓセンターにクワガタ取りに行きたいとの強い希望を持っている。
・思い通りにならないときは不適切な行動（飛び出し･癇癪）につながる。

課題

①我慢できないこと。
②欲しい物をいつでも手に入れてきたこと（周囲や母の問題）。
　　→できないことを伝えられない。
③クワガタに関する知識が少ない。

支援のアイディア

◆要求がかなうこととかなわないことがあることを教えていく必要がある。
◆約束を決めて守ることを教え、守ることができたら褒めることで正しい行動を身に付けていく。

◆すぐには要求に応じない。今までの行動がいきなり改善されるとは思わないので、探しに行くことは認めるなどの妥協点をつくる。
◆望ましい行動と望ましくない行動については、はっきり分かりやすく呈示する。
◆手に入らない経験を重ねることも学習につながるのではないか。

◆クワガタの生態についての知識を与える。毎年同じことが繰り返されるのであればなおさら正しい知識を与える必要がある。
◆インターネットや図鑑などを用いて正しい情報を伝えていく。

実際の対応

インシデント・プロセス法での話し合いを受けて、本生徒には具体的に以下のような対応をした。
・夜に出かけることは難しいことを伝え（生活のルール）、日中にクワガタ取りに行くことを約束する。
・インターネットでクワガタに関する文献をプリントアウトしファイルをつくる。
・約束を守れたときに利用できるよう（強化子）クワガタを用意する。
その結果、夜にクワガタ取りに行くことがかなわないと知った本生徒は、癇癪を起こし飛び出しを試みる。ある程度予測された行動であったため、職員が態勢を組み、すぐ対応することができた。不適切な行動に出ても事態が変わらないことは感じ、それ以降は夜の外出の要求ではなく、クワガタに関する資料が欲しいとの要求に変わってきた。

ウ　個別の生活指導計画に基づく一人一事例研究の取り組み

排泄習慣の確立に向けて（中１　女子）

【目標】

①生活習慣　　＜年間目標＞　排泄後の拭き取りができる。
　　＜前期目標＞　拭き取りの習慣を身に付ける。

②健康・安全　　＜年間目標＞　排便の習慣を身に付ける。
　　＜前期目標＞　定時排便の定着。

【実態】

・排便の習慣が身についていない。（排便リズムが不安定）
・便秘が続くと食欲不振になり便失禁が見られる。
・便失禁をしても不快に感じないため、そのままの状態でも平気で過ごしている。
・排便後の拭き取りも不十分でいつも下着を汚している。

【実践】

①生活習慣

＜年間目標＞　排泄後の拭き取りができる。		
＜前期目標＞　拭き取りの習慣を身につける。		
支援方法・手立て	指導・支援の経過	課題
・トイレに付き添い、トイレットペーパーの巻き取りや拭き取りの練習をする。 ・ウォッシュレットの使い方を教える。 ・入浴前に脱衣場で下着の汚れを確認するよう声がけをする。	・トイレットペーパーの巻き取りはできるようになったが、拭き取りについては声がけや支援が必要である。 ・一人ではウォッシュレットを上手に使用できない。 ・排便の習慣が身に付いていないため便秘になりやすく、便失禁が見られる。 ・下着が汚れたときは職員に伝えるよう全体指導を行った。	・拭き取りについては、継続して練習していく。 ・トイレに付き添い、ウォッシュレットの使い方を教える。 ・便失禁をしたときは、隠さず職員に話すよう指導する必要がある。

②健康・安全

＜年間目標＞　排便の習慣を身に付ける。		
＜前期目標＞　定時排便の定着。		
支援方法・手立て	指導・支援の経過	課題
・起床後、コップ一杯の水を飲む。 ・食後の定時排便を促す。 ・落ち着いて排便できるよう時計を置き、時間の見通しがもてるようにする。	・自ら排便に行くことがないため、朝食・夕食後に排便の時間を設けている。 ・時間の見通しがもてないとトイレに座っていることができないため、トイレ内に時計を設置した。	・定時排便によって排便することができるようになってきている。声がけをしなくてもトイレに行けるよう排便の時間を日課表に組み入れ、掲示する。

・排便のチェック表を記入し意識付けを図る。 ・排便があったときは褒める。	・排便があったときには本人がチェック表に◎印を記入している。 ・意欲的に取り組めるよう褒めることを心がけている。	・チェック表に◎印が付くことで意欲的に取り組めているので継続していきたい。

【排泄チェック】

排泄チェック表	排便◎　失敗×					氏名			
	月(6／6)	火(6／7)	水(6／8)	木(6／9)	金(6／10)	土(6／11)		日(6／12)	
6:00						6:00		6:00	
7:00					7:12×	7:00		7:00	
8:00						8:00		8:00	
学校						9:00		9:00	9:10◎
						10:00		10:00	
						11:00		11:00	
15:00						12:00		12:00	
16:00						13:00		13:00	
17:00						14:00		14:00	
18:00	18:35◎					15:00		15:00	
19:00		19:00◎		19:25×		16:00		16:00	
20:00						17:00		17:00	
21:00						18:00		18:00	
夜						19:00		19:00	
備考						20:00		20:00	
						21:00		21:00	

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
4月																				×	×										
5月																		×	×	×										×	×
6月	○	○				○	○		×	×		○	○			○				○	○	○		○						○	
7月				○	○	○	○	○					○	○	○		○	○		○	○										
8月																						○	○	○			○		○		
9月	○	○			○	○				○		○		○	○										×	○	○				

【成果と課題】

・定時排便を促すことにより排便の習慣が身に付き便失禁がなくなった。

・排便があったときに褒めることで、それが励みになり次も頑張ろうという気持ちになってきた。

・チェック表に◎が付くことで意欲的に取り組めるようになってきた。

・声をかけなくてもトイレに行けるように排便の時間を日課表に組み入れ習慣化を図る。

・拭き取りについては継続して練習する。

・下着が汚れている時（失敗した時）は隠さず職員に伝えることができる。

7　研究のまとめ

（1）　成果

○インシデント・プロセス法の研修会や事例研究会を実施したことにより、インシデント・プロセス法の手法や特徴を学ぶことができた（1年次）。

○インシデント・プロセス法での研究会では、問題の解決策を参加者全員が主体的に考えることができるので、より深い共通理解につながりチームで支援する態勢作りにつながった（1年次、2年次）。

○インシデント・プロセス法を用いて、個別の生活指導計画の作成や、共通理解を図って対応にあたりたい事例の研究会を行い、日常的な活用を目指した。その結果、インシデント・プロセス法の具体的な活用方法についての指針を得た（2年次）。

（2）　課題　（研究会後のアンケートより）

○インシデント（小さな出来事）をもとに話合いを進めるため、難しい事例への対応は難しいと感じた。

○今後はさらに日常的な取り組みとなり、すぐ支援に移していけると良い。

○支援のアイディアを参加者から頂くわけだが、アドバイスをもらった後の変化や経過が断片的にしか見えてこないため、生徒の変容を追うまでには至らなかった。

（3）　まとめ

２年間にわたり「児童生徒が生活力を獲得するための支援の工夫と実践」のテーマのもと、事例研究を通したチームでの支援の在り方を探るべく取り組みを行ってきた。先行研究の中から、効果的な事例研究の方法として「インシデント・プロセス法」を選択し、講師を招いての研修会を行い、インシデント・プロセス法の手法を学んだのが１年次の取り組みである。2年次は日常的な活用を試み、児童生徒一人一人に行われている「個別の生活指導計画」の支援の手立ての中に取り入れた。また、担当が支援に迷った場面での突発的な申し出を受けインシデント・プロセス法を用いて職員全員が共通理解を図った上で支援に当たった。このようにインシデント・プロセス法で得られた支援のアイディアをどのような場面での活用が有効かを探りながら取り組みを行った。

上述されている研究の成果と課題は、この２年間を振り返り今回の研究に取り組んだ感想を職員全員からアンケートとして取ったもののまとめである。今年度の取り組みにより、学んだ手法を生かす場面の指針は得ることができた。しかし、すぐに支援に生かす態勢までは至らなかったとの意見が多かった。また、その支援のアイディアが具体的にどのように児童生徒の支援につながっていくのかが明確ではなかったとの意見もある。

今回の研究は2年次で終わりとなるが、「インシデント・プロセス法」に限らず、事例研究会が児童生徒への理解を深め、情報共有やアイディアを出し合う場として重要な役割をもっていることはいうまでもない。今後も、支援につながる事例研究会に取り組みながら、児童生徒の生活力の獲得を図っていきたい。

全体研究

（１）　１年次の成果と課題

ア　キャリア教育の視点を授業（指導や支援）に生かす取組

a　成果

・ キャリア教育への意識を高めることができた（全校・学部研、センター要請研修、各講演会など）。
・ 授業（指導）をつくるときに、児童生徒の将来を見据えて取り組むようになってきている。
・ 略案の様式の中に、キャリア教育の観点を明記することを確認したことで、授業の目標や内容、支援が明確になりつつある。
・ キャリア教育の視点を取り入れた授業を目指す中で、児童生徒の実態や目標の共通理解につながった。

b　課題

・ 小中高それぞれの「将来」をどこに（例；何年後）設定したらよいかの捉えが曖昧であった（小低は小高、小高は中、中は高、高は卒業後が妥当か）。
・ 小中高の系統性をもたせるための取り組みが不足している。
・ 「キャリア教育の視点で授業を点検する」とはどういうことかの検証が不足（全校授業研については、目標・内容・支援の柱で点検）している。
・ キャリア教育の視点に可能な限り特化した授業内容の検討が必要である。
・ キャリアプランニング・マトリックス（試案）の使用の仕方や理解のされ方について、職員間でばらつきがある。
・ 個別の指導計画・個別の教育支援計画（学部）、個別の支援計画（舎）などとの関連について検討が必要である。
・ ワークキャリアとライフキャリアのバランスの検討ができなかった。

イ　効果的な授業・事例研究会（ワークショップ型・インシデントプロセス法）を目指す取り組み

a　成果

・ 授業は改善していくものであるという意識が定着してきている。
・ 授業提案者にとって、必要な意見を多数得ることができた。
・ 活発に意見を出しやすい雰囲気の中で研究会に取り組むことができた。これは、キャリア教育の視点を取り入れた授業改善を目指すときに、最も重要なことであった。
・ 研究会を通して、参加者各自の指導へ生かす視点も得ることができた。

b　課題

・ 研究会後の授業（指導）が、どのように変化（改善）していったかの検証が不足している。
・ 他の個別の指導計画・個別の教育支援計画（学部）、個別の支援計画（舎）をも

とにした、実態や目標、指導・支援の共通理解を目的としたものとの使い分けや関連が不明確であった。

（２）２年次の研究実践

ア　キャリア教育の視点を授業（指導や支援）に生かす取り組み

a　全校授業研究会

各学部１回ずつ取り組んだ（詳細は各学部研究を参照）

b　学部研究

c　校内研修会

校内職員のニーズを基に、２回行った。①心のケアについて（講師；臨床心理士）、②実習先や就労先の確保に向けた研修（講師；進路指導部）

d　岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会講演会

筑波大学人間総合科学研究科障害科学専攻教授の藤原義博先生を講師に、「一人一人の自立を目指した授業づくり」という演題で、講演会を実施した（詳細は平成２３年度岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会「研究集録」を参照）。

イ　効果的な授業・事例研究会（ワークショップ型授業研究会、インシデントプロセス法）を目指す取り組み

a　ワークショップ型授業研究会の実践

３回の全校授業研究会の実践と、事後に授業者と参加者にアンケートを実施して、効果的な研究会を検討した。

課題→改善点

・研究会としてのまとめを深めたほうが良い。→県教委の指導主事（来校できないときは研究部長）に、キャリア教育の観点で助言を依頼した。

・授業を見ることができない人が多い。→（来年度）研究会開始前に、授業の様子をビデオで流す。

・協議の柱が抽象的→授業者が参観者に意見を聞きたいことを基本とし、授業者と研究部で協議を行って決めるようにした。

b　インシデントプロセス法による事例検討会（寄宿舎）の実践　＊寄宿舎資料参照

ウ　２年次の成果と課題

a　キャリア教育の視点を授業（指導や支援）に生かす取り組み

①　成果

・学部間での系統性をもたせるために、小学部では、中学部高等部職員に対して、小学部段階で身に付けさせたい力についてアンケートを取り、共通理解を図った。以上の取り組みをする中で、普段の授業（指導）に根拠が生まれた。

・キャリア教育を特化した授業として、中学部では生活単元学習「ハッピーライフ」、高等部では、「産業社会と人間」などの効果的な指導を検討することができた。

・ライフキャリアと言う視点について、高等部では、余暇の面について具体的に検討することができた。

② 課題

・キャリアプランニングマトリックスの活用について、より効果的（授業の意図が明確になり、共通理解しやすくなる）に活用する方法（解説の理解や用語の再検討）の検討が必要である。

b 効果的な授業・事例研究会（ワークショップ型・インシデントプロセス法）を目指す取り組み

① 成果

・各学部・寄宿舎において、授業・事例研究会後の児童生徒や授業（指導）の変化について、継続して検討することができてきている。

・個々の教師の、授業づくりや改善の視点が拡大した。

② 課題

・より日常的な授業・事例研究会、もしくは授業や指導について検討する機会の検討が必要である。

Ⅶ 研究のまとめ

今回の２年間の研究に、全職員がより主体的に取り組んだことで、それぞれ多くの知見を得ることができた。特にも、①キャリア教育の理念、②授業（指導）は改善していくものであるという意識、③様々の課題に対して、チームで取り組むという意識の３点について、参加型の研究活動の中で体験的に研修できたことは有意義であった。これらを研修し、日常的に意識できるようになってきたことで、実践の中に多くの成果が見られた。具体的には、以下の３点が挙げられる。

1 児童生徒の将来像を考え、職員間で共有することにつながった。

2 キャリア教育の視点で日常の授業を捉え直すことができた。

3 授業の目標や内容、支援にキャリア教育の視点を取り入れられた。

これらを教職員が実践できたときには、日々の授業が将来に結び付いていると実感することにつながった。

課題も残った。小中高の学部を超えた系統性・発展性のある教育活動の検討、キャリア教育の視点を個別の指導計画・教育支援計画への位置付けができなかったことなどである。つまり、各学部や寄宿舎、あるいはより小さな集団単位での成果は多く得られたが、学校全体としての組織的な取組や、個別の指導計画・教育支援計画への位置付け、保護者との連携などのシステムへの般化はできなかった。

また、個々の教職員の専門性の向上に直結する研究活動であったかという点についても課題が残る。キャリア教育の視点を重視した上での児童生徒を実態把握する力、指導内容・指導方法を検討し実行する力、児童生徒や授業を評価し、次時に生かす力などを身に付けるには、より良い研究の内容や方法を検討していく必要がある。

今後は、日常の実践活動の中で、より児童生徒一人一人の将来を見据えた（または児童生徒の将来像へ本人、保護者、職員などかかわる人みんなで夢を語り合いながら）指導ができるような教職員の専門性の構築、またはシステム作りに取り組んでいきたい。